

29 『ナツヤスミ語辞典』成井豊

○ジャンル／ファンタジー

○ストーリー／カブト・ヤンマ・アゲハは中学2年。夏休み、水泳嫌いのヤンマは、水泳の補習に出るのがいやで、プールの水を抜いてしまおう。罰として、プール掃除を命じられたヤンマに、カブトとアゲハも付き合うことに。そこへ、白い服を着た男が現れ、∞人に話しかける。男はウラシマと名乗り、カブトが持っていたカメラで写真を撮る。その晩、カブトが現像してみると、そこに写っていたのは15年前の景色だった……。

○出演者／男7＋女11＝計18

○上演時間／120分

登場人物

カブト (中学2年)

ヤンマ (中学2年)

アゲハ (中学2年)

クサナギ (俳優・元産休代用教員)

ウラシマ

ナナコ

ムロマチ (カメラマン)

アヅチ (ムロマチのアシスタント)

モモヤマ (ムロマチのアシスタント)

ミドリ先生 (英語科教諭・カブトの担任)

アオタ先生 (体育科教諭)

カニタニ (中学2年)

郵便屋  
アゲハの母  
ヤシマの母  
ウスイケ母  
サルサワ  
(女優)  
(魚屋)  
(中学2年)  
(中学2年)

カブトがやってくる。地面に、麦わら帽子が落ちていふことに気づく。周囲を見回す。麦わら帽子に歩み寄り、拾い上げる。と、その下に、カメラが置いてあった。カブトがカメラを持つ。フアインダーを覗き、シャッターを切る。そこへ、たくさんの人々がやってくる。カブトのそばを次々と通りすぎる。カブトは一人一人にカメラを向け、シャッターを切る。そこへ、ウラシマがやってくる。カブトはウラシマにカメラを向ける。が、ウラシマはカブトに背を向けて、シャッターを切らせない。カブトがウラシマに呼びかける。が、ウラシマは行ってしまふ。ウラシマ以外の大人たちも、みんな去る。カブトの周りには、中学生五人だけが残る。そこへ、ミドリ先生がやってくる。

ミドリ先生 大掃除は終わったか！

六人 オー！

ミドリ先生 机の中も空っぽにしたか！

六人 オー！

ミドリ先生 教科書もテストも、給食の残りのカビの生えたパンも入ってないな？

六人 オー！

ミドリ先生 通信簿も、忘れたフリして、置きっ放しにしてないな？

六人 オー！

ミドリ先生

六人

ミドリ先生

ウスイケ

ミドリ先生

カニタニ

ミドリ先生

カニタニ

ミドリ先生

カニタニ

ミドリ先生

六人

ミドリ先生

ウスイケ

ミドリ先生

カニタニ

ミドリ先生

後にどんな悲劇が待っているよと、ちゃんとお母さんに見せるんだぞ。オー！

それじゃ、これで一学期はおしまい。学級委員の号令で、気をつけ、礼をした瞬間から、待ちに待った夏休みの始まりです。ウスイケさん。気をつけ。礼。

ウスイケさんが言うまでは、まだ夏休みは始まりません。

先生、早く礼をしましょう。

カニタニさん、焦っちゃダメ。夏休みはすぐそこまで来てるんだから。

でも、私、もう待てません。

どうして？

だって、私、この日が来るのを、一年も前から待ってたんです。去年の九月

一日から、次の夏休みまであと三二六日、あと三二五日って。

そして、今日が最後の一日。あとほんのちよつと我慢すれば、夏休みが始まるのよ。うれしいでしょう？ うれしいでしょう？ うれしいでしょう？

うれしいです！

わかる。みんなの気持ち、よくわかる。ウスイケさん。

気をつけ。礼。

ウスイケさんが言う前に、一言だけ、みんなに言っておきたいことがあります。

もう、早くしてくださいよ。

そんなふうに夏休みが待ち遠しいって思えるのも、もしかしたらこれが最後の来年の夏休みは、誰も待ち遠しいとは思わないでしょう。なぜなら、三年生は受験の季節。夏休みだって、毎日毎日勉強で、遊んでる暇なんか一日もな

いんです。

アゲハ  
カニタニ  
いいえ、私は来年も遊びます。

アゲハ  
カニタニ  
そんなことを言ってる余裕があるのかしら。今の成績で。

カニタニ  
カニタニ  
あら、国語のテストが十八点だった人に、とやかく言われたくないわ。

カニタニ  
何だと？

ミドリ先生  
だから、やっぱり今年が最後。最後だから、学校とか宿題とかこれからの人

六人  
生とか、面倒臭いのは全部押入れに放り込んで、一夏まるごと遊んでやれ！

六人  
オー！

ミドリ先生  
と思ったのが、転落への第一歩。統計によりますと、十代の少年少女が最も

非行に走りやすい季節がなんと、中学二年の夏休み。今年の夏は、人生八十

年の中で、一番危険な夏なんです。危険な夏休みを安全に過ごすには、どう

したらいいか。私が出した答えは、夏休みの計画表。さあ、みんな、持って

きて！

六人が奥へ走り去る。

ミドリ先生  
計画表なんて、普通は小学生が書くものかもしれません。でも、暴走族に入

って、警察に補導されてから、「あの時、計画表さえ書いておけば」って後

悔しても遅いんです。備えあれば憂いなし！

六人が戻ってくる。手には、大きな白い紙を筒形に巻いたもの。ミドリ先生の合図で、  
六人が紙を広げる。夏休みの計画表が、色とりどりに描いてある。

ミドリ先生　それじゃ、まずはヤマダさんの計画表から見せてもらいましょうか。

ヤンマが前に出る。他の五人は座る。

ミドリ先生　えーと、七月二十一日、こころ、羅生門、黒い雨。二十二日、ハムレット、

罪と罰、若きウエルテルの悩み。何よ、これ。本の題名ばかりじゃないの。

ヤンマ　新潮文庫の百冊です。

ミドリ先生　まさか、一夏で百冊制覇するつもり？

ヤンマ　一日に三冊読めば、十分可能な数字です。

ミドリ先生　中には読まなくていい本もあると思うけど。まあ、ヤマダさんの健闘を祈り  
ましよう。それじゃ、次はオオシマさん。

アゲハが前に出る。ヤンマは座る。

ミドリ先生　えーと、七月二十一日、築地本願寺。二十二日、増上寺、寛永寺、浅草寺、

柴又帝釈天。今度はお寺の名前ばかり。まさか、これ全部お参りしようつ  
て言うの？

アゲハ　お参りじゃなくて、幽霊に会いに行くんです。

ミドリ先生　幽霊に？　ちよつと待ってよ。いくら夏は幽霊の季節だって言ってもね、昼  
間からは出ないわよ。

アゲハ　よく見てください。この表は、夜の六時から朝の六時までのスケジュールな  
んです。

ミドリ先生　一夏丸ごと夜遊びするわけ？

アゲハ

遊びじゃありません。研究です。ムロマチさんにカメラを借りて、ちゃんと写真も撮ってきます。先生にも一枚あげましょうか？

ミドリ先生

写真より、計画表がもう一枚ほしいな。朝の六時から始まる計画表が。

アゲハ

それだと、睡眠だけになっちゃうんですけど。

ミドリ先生

だったら、計画そのものを変えなさい。おいおい、もつとまともなのはないのかよ。

カニタニ

私のはまともです！

サルサワ

私も！

ウスイケ

私も！

カニタニ・サルサワ・ウスイケが前に出る。アゲハは座る。

ミドリ先生

あら、本当。宿題、部活、おうちのお手伝い、ちゃんと四十日全部埋めてあるわね。これは三人ともハナマルかな。

アゲハ

でも、これ、みんな、字が同じ。

カニタニ

バカヤロー！

ミドリ先生

カニタニさん、この三枚は誰が書いたの？

ウスイケ

（手を挙げて）私です。

ミドリ先生

ウスイケさん、学級委員のあなたが、どうしてこんなことをしたの。

ウスイケ

計画表を書くのが楽しくて、つい他の人の分まで書きちゃったんです。

ミドリ先生

わかる。あなたの気持ち、よくわかる。でもね、カニタニさんの夏休みは、カニタニさんのもの。サルサワさんの夏休みは、サルサワさんのもの。夏休みだけなのよ。あなたが計画を立てられるのは、あなたの夏休みだけなのよ。

カニタニ  
だから、計画を立てたのは私たちで、ウスイケさんには口述筆記をしてもらったんです。

ミドリ先生  
自分のことは自分でやるの。あなたの夏休みでしょう？ カニタニさん、サルサワさん、それからオオシマさん、今日は全部書き直してからでないかと、帰れませんかからね。それまで、夏休みはお預けよ。

カニタニ  
ミドリ先生

そんなあ。  
あれ？

ミドリ先生がカブトに歩み寄る。

ミドリ先生  
ムロマチさん、あなた、何にも書いてないじゃないの。

カブト  
はい。

ミドリ先生  
はいじゃないでしょう。どうして計画を立てようとしらないの。

カブト  
計画は立てました。

ミドリ先生  
立てたなら、書けばいいでしょう。

カブト  
書けないんです。

ミドリ先生  
どうして。

何が起るかわからない、そんな夏休みにしたいと思ったから。

ミドリ先生と六人の中学生が去る。



松葉杖をついて、クサナギがやってくる。

クサナギ

人間の体が、こんなに壊れやすいものだとは思いませんでした。刑事ドラマの犯人役で、東京駅のロケ。階段をタッタタッって駆け降りて、一瞬後ろを振り返るってカットだったんですけど、途中で一段踏み外したんですね。危ない、危ないって思いながらも、勢いがついてるから止まれない。あれはもう、駆け降りるって言うより、空中でもがいてるって感じでした。しかし、僕は最後まで諦めなかった。残り五段でところで、一気にタンツて跳んだんです。着地は見事に決まりました。タンツて跳んで、ブチ。イヤな音だった。アキレス腱が太いですからね。カメラさんにもよく聞こえたそうです。カットコよく着地して、カットコよく振り返ろうと思ったのになあ。顔のアップなんて、そのカットだけだったから。こうして、大学卒業以来、久しぶりの夏休みがやってきたわけです。

クサナギが座る。そこへ、郵便屋が自転車に乗って、やってくる。

郵便屋  
クサナギ  
郵便屋

（周囲を見回して）あの、こちらのお宅の郵便受けは遅い？  
は？

クサナギ

郵便屋

クサナギ

郵便屋

クサナギ

郵便屋

クサナギ

郵便屋

クサナギ

郵便屋

クサナギ

郵便屋

クサナギ

郵便屋

クサナギ

郵便屋

遅いって言ったんだよ。本当なら、その手紙は一週間も前に届くはずだったんだ。それを、今日まで待たせやがって。どうしてこんなに遅くなったんだ。理由を説明しなさい。

そう言われても、僕にはちよっと。

まさか、わざと遅らせたんじゃないだろうな？

わざと？

僕に意地悪するためには。僕がいつも郵便番号を書かずに手紙を出すから、仕返ししてやろうって。

郵便局がそんなみみちいこと、するわけないでしょう。

いや、わからないぞ。お年玉つき年賀ハガキだって、今年は一つも当たらなかったし。僕に届いたハガキの番号をメモしておいて、わざとハズレにしたんだろう。

バカなことを言わないでください。配達が遅くなったのは、郵便局のせいじゃありません。消印だって、昨日の日付になってますし。

消印までごまかすとは、手が込んでるな。

ごまかしてません。

あくまでシラを切るつもりか。まあ、今日のところは許してやろう。結局、手紙は届いたわけだし。ほら、早くこっちへ持ってきなさい。

先を急いでるんですよ。自分で取りに来てください。

遅くなつて悪かつたと思ってるなら、ここまで持ってこいよ。

別に悪かつたとは思ってません。

お、居直るのか？

だって、悪いことは何もしないんですから。僕は郵便配達の仕事に誇りを

クサナギ

持っています。目標は宇宙一の郵便屋です。それなら、配達される人のことも、少しは考えたらどうだ。(松葉杖を見せる)

郵便屋

なんだ、怪我をしてたんですか。

クサナギ

宇宙一の郵便屋なら、体の不自由な人のために、家の中まで持ってきてくれないんじゃないか？

郵便屋

それくらいは当然のことですよ。(クサナギに歩み寄り、封筒を差し出して)どうぞ。

クサナギ

(受け取って) ヤマダミユキ？ 誰だよ、この人。知りませんよ。

郵便屋

僕だって、知らないよ。僕が待っていたのは、こんな手紙じゃない。さっさと持って帰ってくれ。

郵便屋

そんなことできませんよ。子供の頃、お母さんに言われなかったか？ 知らない人から物をもらっちゃ

クサナギ

いけませんよ。でも、これ、女の人じゃないですか。いくら知らない人だって、若くてキレイで独身だったら、話は別でしょう。

クサナギ

名前だけで、どうしてわかるの？

郵便屋

理由は特にありませんけど、僕は手紙のプロですから。バカなことを言うな。あつ！

クサナギ

もしかして、思い出したんですか？

郵便屋

ヤンマだ。そうだと、ヤンマだよ。確かに、若くて独身だ。でも、あれがキレイって言えるかな。

郵便屋  
クサナギ

知ってる人だったら、別に汚くてもいいじゃないですか。汚いなんて失礼だな。この子は僕の教え子なんだぞ。こう見えても、僕は元教師なんだ。教壇に立ったのは、半年だけだったけど。ほらほら、産休代用教師っているだろう？ あれで突然、担任になった。五年三組。やかましいクラスだった。その中でも特にやかましかったのが、このヤンマでさ。あれからもう三年か。

郵便屋

あの、そろそろ次の家へ行きたいんですが。

クサナギ

もう少しいいじゃないか。今、麦茶をいれるから、一休みしていけよ。

郵便屋

まだ仕事がたくさん残ってますんで。

クサナギ

でも、外は暑いだろう？ 麦茶、よく冷えてるよ。砂糖が入ってるのと入ってないのと、二種類あるんだよ。どっちがいい？

郵便屋

お気持ちはどうでしょう？ 仕事をサボるわけにはいきません。

クサナギ

そんなに固いこと言わないで。

郵便屋

僕は宇宙一の郵便屋ですから。

郵便屋が自転車に乗って、去る。

クサナギ

宇宙一の郵便屋か。僕には「誇りある俳優」なんて言えないな。怪我をした俳優なんて、何の使い道もないんだから。一人で部屋に閉じこもっていると、とっても不安になるんです。このまま一生、役がもらえないんじゃないかって。せっかく先生を辞めて、俳優の道を選んだのに。そんな時に届いた手紙。

クサナギが椅子に座り、手紙を開く。

クサナギ

「暑中お見舞い申し上げます。お久しぶりです、先生。私のこと、覚えてますか？」。覚えてますよ。お勉強が大好きで、すぐにその場で答えられないような難しい質問をいっぱいしてくれた、ヤンマくん。「そうです。ヤンマです。やっぱり覚えていてくれましたか。まあ、あれから三年しか経ってませんからね。覚えてなかったら、人間失格ですよ」。こういうところが憎らしいんだよな。「私は今、太宰治の『人間失格』を読んでいます。私はいつも小説を読む時、登場人物を俳優に当てはめて読むんですけど、この小説の主人公は先生にしました。先生も一応、俳優でしょう？」。一応とはなんだ、一応とは。どうせ主人公にするなら、『源氏物語』にでもしてほしかったな。「さて、こうして久しぶりに手紙を書いたのは、別に先生が好きだからじゃありません。国語の宿題が、先生に手紙を出す、必ず封書で、原稿用紙三枚以上って訳のわからないやつで、どの先生に出せって書いてないから、クサナギ先生にしたのです」。そんなの、国語の先生に決まってるじゃないか。「後で文句を言われたら困るので、先生の方から確かに届いたって連絡しておいてください。それでは、さようなら」。さようなら？（二枚目を見る）「と、これで終わってしまったのは、枚数が足りません。今日の出来事でも書いて、無理矢理三枚にしましょう。今日は体育の補習で、午後から学校へ行きました」

別の場所に、ヤンマが現れる。

ヤンマ

体育の補習は水泳です。二十五メートル泳げない人は、泳げるようになるま

クサナギ

ヤンマ

クサナギ

ヤンマ

で、この補習に通わなければいけません。中学生にもなつて、泳げない子なんているのかね。ちなみに、私は五メートルしか泳げません。五メートルじゃ、泳げるうちに入らないよ。水の中でもがいてもがいて、もう息が苦しい、我慢できないって足を着けると、なぜか五メートル進んでいるのです。でも、私は別に泳げるようになります。たいとは思いません。

クサナギ

ヤンマ

人間は陸上動物です。二本の足は、陸地を歩くためにあるのです。せつかく進化して、水から上がったのに、またわざわざ水の中に戻ることはないのです。

クサナギ

ヤンマ

でも、もし溺れたら、どうする？私はお風呂以外の水には絶対に近付きません。だから、溺れる心配なんて、する必要なし。

クサナギ

ヤンマ

僕が読んでどう思うか、わかっているみたいだな。でも、補習に出ないわけにはいきません。そこで第一目の今日は、カブトとアゲハに付き合ってもらいました。

そこへ、カブト・アゲハが飛び出す。後を追つて、アオタ先生・カニタニ・サルサワ・ウスイケが飛び出す。

アオタ先生  
ヤンマ

ヤマダ、おまえはそんなに先生が嫌いかな。別に、先生のことは嫌いじゃありません。

アオタ先生

ヤンマ

アオタ先生

アゲハ

サルサワ

ウスイケ

サルサワ

アゲハ

アオタ先生

ヤンマ

アオタ先生

カニタニ

アゲハ

カニタニ

アゲハ

カニタニ

サルサワ

ウスイケ

三人

じゃ、好きか？

私は水泳が嫌いなんです。でも、補習にはちゃんと来ました。

中止になるってわかってるから、来たんだろう。

え？ 補習は中止なの？

プールの水がないのよ。

（アゲハに）昨夜、誰かが学校に忍び込んで、プールの水を抜いちやったら

しいの。

（アゲハに）そうとも知らずに、アオタ先生ったら、いきなり飛び込んだじゃ

って。

だから、頭に包帯を巻いてるんだ。

誰の仕業か、先生には大体見当が付いている。

私がやったって言うんですか？

誰とは言わない。先生は、本人が正直に言ってくれるのを待ちたいと思う。

ヤマダさん、先生が怒り出す前に、謝ったらどう？

どうしてヤンマがやったって決めつけるの？

私たち三人がやってないのよ。残りはヤマダさんしかないでしょう？

カニタニさんがやってないって証拠はあるわけ？

証拠はないけどさ、昨夜のうちに水を抜いておいて、素知らぬ顔で補習に来るなんて、絶対に極悪人の仕業よ。その点、私は、クラスの悪を取り締まる

風紀委員。

私は病を取り締まる保健委員。

私はその他すべてを取り締まる学級委員。

三人合わせて、二年A組のチャーリーズ・エンジェル。

カニタニ

だから、犯人はヤマダさんなのよ。

アオタ先生

先生は、本人が正直に言ってくれるのを待ちたいと思う。

カニタニ

ほら、ヤマダさん、先生がさっきから、待ちくたびれてるわよ。

ヤンマ

先生は、私がやったって思ってるんですね？

アオタ先生

先生は何も思っていない。ただひたすら待ってるんだ。

ヤンマ

でも、さっき、中止になるってわかってるから来たんだろうって言いましたよ、ね？

アゲハ

言った言った。私、覚えてる。

ヤンマ

(アオタ先生に) 先生が生徒を疑っていいんですか？

アゲハ

(アオタ先生に) ヤンマのことを疑っておいて、ヤンマが犯人じゃなかったら、どうするんですか？

アオタ先生

アオタ先生、ピンチ！

クサナギが拍手する。

クサナギ

そうだそうだ。生徒を信頼しないで、何が教師だ。思春期の女の子は傷つき

ヤンマ

やすいんだぞ。これで、ヤンマが転落への第一歩を踏み出したら、どうするんだ。

クサナギ

クサナギ先生はどう思いますか。

クサナギ

僕はもちろんヤンマの味方さ。僕の知ってるヤンマに、そんな悪いことは

ヤンマ

きない。

クサナギ

本当にそう思いますか？

クサナギ

僕はヤンマを信頼してるんだ。犯人は、そのカニタニって子だろう。勉強は



ヤンマ  
クサナギ

カブト

ヤンマ

カブト

ヤンマ

カブト

アオタ先生

ヤンマ

アオタ先生

カニタニ

アオタ先生

サルサワ

ウスイケ

アオタ先生

できなくても、悪いことには知恵が回りそうだ。だから、半年でクビになるんです。犯人は私です。エーッ！

ヤンマ、そろそろ本当のことを言えよ。

何よ。カブトまで、私のことを疑うの？

だって、ちよつと考えれば、わかるじゃないか。おまえは手ぶらで学校に来た。水着を持たずに。

いけね。忘れてきちゃった。

水泳の補習に、水着を忘れるバカがいるかよ。中止になるってわかってたから、持ってこなかったんだらう？

（ヤンマに）やっぱり、おまえがやったのか？

そうです。私が水を抜いたんです。

そうか。一時はどうなることかと思つた。一瞬、辞表を書いてる自分の姿が目の前にちらついてしまった。

（ヤンマに）やっぱり、私の言つた通りじゃないの。

カニタニ、そんなにムキになるな。確かに、ヤマダのしたことは悪いことだが、最後は自分から正直に言つたじゃないか。正直な人間を責めることは、誰にもできないぞ。

それじゃ、もう怒らないんですか？

（アオタ先生に）ヤマダが来たたら、俺みたいに、空のプールに飛び込ませてやるって言つてたじゃないですか。

怒らないが、反省はしてもらおう。せつかくプールの水を抜いたんだ。ついでに、プールの掃除をしていってもらおう。

カニタニ なるほどね。

アオタ先生 ムロマチとオオシマもやっていくだろうか？

アゲハ どうして私たちまで？

カニタニ 犯人を庇っただろう？ おまえらだって、共犯なんだよ。

サルサワ・ウスイケがデツキブラシを三本持つてくる。カブト・ヤンマ・アゲハに押しつける。

アオタ先生 俺たちは体育館へ行って、バスケットをやるう。ウスイケ、おまえは図書室

ウスイケ に寄って、ミドリ先生を呼んでこい。教員チームと生徒チームで、対決だ。

アオタ先生 ミドリ先生がやりたくないって言ったら？  
その可能性は全くない。なぜなら、おまえが命懸けで説得するからだ。よし、行くぞ。

アオタ先生・カニタニ・サルサワ・ウスイケが去る。

クサナギ

「自分で蒔いた種は、自分で刈り取るしかありません。アゲハはブーブー言いました。擦っても擦っても、ゴールは遠い彼方。真夏の太陽を浴びて、汗はダラダラ、喉はカラカラ、水をガブガブ、おなかにはタツプンタツプン。でも、アオタ先生が覗きに来ると」

アオタ先生がやってくる。三人がサングラスをかける。

アオタ先生

どうだ、おまえたち。辛かったら、そろそろ勘弁してやってもいいんだぞ。

アゲハ

私さあ、この夏はダイエットしようと思ってたんだ。

カブト

今日一日で、三キロは痩せるぜ。

アゲハ

ラッキー。

ヤンマ

私は海に行つて、日焼けしようと思つてたんだけど。

カブト

今日一日で、ボブ・サップになれるぜ。

ヤンマ

ラッキー。

アオタ先生

そうか。じゃ、目標が達成できるまで、頑張つてくれ。俺はカニタニたちと

かき氷を食ってくる。

アオタ先生が去る。

クサナギ

アゲハ

ヤンマ

アゲハ

ヤンマ

アゲハ

ヤンマ

アゲハ

ヤンマ

アゲハ

カブト

アゲハ

クサナギ

アゲハ

そこへ、ウラシマがやってくる。

ウラシマ

アゲハ

ウラシマ

アゲハ

「しかし、さすがに一時間も擦っていると、腰は痛むし、手は疲れるし」

ヤンマ、もうそろそろアオタ先生の所に行かない？

何しに？

だから、謝りによ。

どうして私が謝らなくちゃいけないわけ？

口だけでいいのよ。もう充分に反省できました。この辺で勘弁してください

ってさ。

私、反省なんかしてないもんね。

そう言わなかったら、途中で止めさせてくれないじゃない。

悪いことをしたら、謝るか、罰を受けるか、どっちかでしょう？

た上に、謝るなんて、絶対にイヤだ。

また意地を張って。

そのうち、先生の方から、「もう帰っていい」って言ってくるよ。

アオタ、早く来いよ。  
「しかし、そこへ現れたのは、全く別の人物でした」

君たち、不良？

不良とは何だよ、不良とは。

だって、その言葉遣いと、そのサングラス。

あ、これは、太陽が眩しすぎるから。(サングラスを外す)

ウラシマ  
アゲハ  
ウラシマ  
アゲハ  
カブト  
アゲハ  
ウラシマ  
カブト  
アゲハ  
ウラシマ  
カブト  
ヤンマ  
ウラシマ  
カブト  
ヤンマ  
ウラシマ  
アゲハ  
ウラシマ  
アゲハ

それじゃ、君たち、水泳部？  
違います。今日は体育の補習で。

水泳部でもないのに、プール掃除か。暑い中、大変だね。  
ええ、まあ。

(小声で) 先生か？

(小声で) 知らない。

こんなに暑いってことは、今は夏だね？

ええ。(カブトに) 夏よね？

夏だよ。夏休みなんだから。

へえ、夏休みか。冬休みじゃないのか。

(カブトに小声で) 変な人。

(小声で) 目を合わせないようにしよう。

ねえ、君。君だよ、君。三人の中で、一番足の細い子。

私ですか？

バカ！

(ヤンマに) ちよっとど忘れしちゃったんだけど、今年って何年だっけ？

二〇〇三年ですけど。

こら、大人をからかうんじゃない！

からかってませんよ。ねえ、カブト？

(ウラシマに) あなた、どこの誰ですか？

いけないですよ。 用のない人は、学校に入っちゃ

本当に、今年は二〇〇三年なのか？

カブト、ヤンマ、アオタ先生の所へ行こう。

ウラシマ  
アゲハ  
ウラシマ  
アゲハ  
ウラシマ  
アゲハ  
ヤンマ  
ウラシマ  
アゲハ  
ウラシマ  
アゲハ  
ウラシマ  
カブト  
ウラシマ  
カブト  
ウラシマ  
カブト  
ウラシマ  
ヤンマ  
ウラシマ  
ヤンマ  
ウラシマ  
アゲハ

ちよつと待てよ。逃げることはないだろう？

こつちに來ないで！（デツキブラシをウラシマに突き出す）

わかつたわかつた。これ以上近付かないから、僕の質問に答えてくれよ。

一歩でも動いたら、大きな声を出すわよ。

もう出してるじゃないか。

もつと大きな声を出すわよ。

わかつた。約束する。

それじゃ、指切り。なんか、照れるなあ。（一歩踏み出す）

え？ 女の子と指切り？ なんか、照れるなあ。（一歩踏み出す）

アオタ先生！

汚いぞ、おまえら！

それで、おじさんの質問て何さ。お兄さんなら一人いる。

お兄さんの質問て何さ。

今年は何年だ。

それはさっき言ったでしょう？ 本当に、二〇〇三年なのか？ 一九八八年じゃないのか？

（カブトに）間違いないよね？

間違いないよ。私が生まれたのが一九八九年で、今年十四になったから、二

〇〇三年。

十五日が十五年？ そんな話は聞いてないよ。（座り込む）

変な人。

ねえねえ、校長先生の話、覚えてる？ 終業式の時に言ってたでしょう？

カブト  
アゲハ  
カブト  
アゲハ  
カブト  
ヤシマ  
アゲハ  
ウラシマ  
カブト  
ウラシマ  
カブト  
ウラシマ  
ヤシマ  
ウラシマ  
カブト  
ウラシマ  
カブト  
ウラシマ  
ウラシマ

夏になると、学校の近辺に変質者が現れるって。  
こんな真っ昼間に現れるかな。

カブト、カメラ。

あんなヤツを撮るのか？

証拠写真になるでしょう？ ほら、早く。

(ウラシマに) すみません、ちよつとこつちを向いてください。

(ウラシマに) 聞こえてるんでしょう？ こつちを向いてよ。

(ウラシマに) おじさんてば！

おじさんはここにはいない！

(シヤッターを切つて) オーケイ、撮れました。もう帰っていいですよ。

そのカメラ。

私のですけど。

ちよつと貸してくれる？

イヤです。

お返しに、君たちを撮ってあげるよ。プール掃除の記念にどうだい？

こんなの、記念にしたくない。

じゃ、夏休みの記念に。こう見えても、プロのカメラマンだからね。ファッ

ション雑誌のグラビアみたいに、カッコよく撮ってあげるよ。

お兄さん、プロのカメラマンなの？

ああ。まだ駆け出しなんです、主な仕事は荷物持ちだけ。

要するに、アシスタントか。だから、何もわかってないんだ。いいかい、お

兄さん。プロのカメラマンは記念写真なんか撮らないんだよ。いいかい、お

どうして？

カブト  
アゲハ  
カブト

ウラシマ  
カブト  
ウラシマ

カブト  
ウラシマ  
アゲハ  
ヤシマ

クサナギが机を叩く。

クサナギ

ヤシマ  
クサナギ

ヤシマ  
クサナギ

だって、バカバカしいじゃないか。アルバムに貼るための写真なんて。写真で、アルバムの貼るために撮るんじゃないの？

バカ。そんなの、ただの思い出だろう？ 写真は過去を懐かしむために撮るんじゃない。真実を捕まえるために撮るんだ。

カッコつけちゃって。どうせ、本か何かで読んだんだろう？ 違うよ。プロがそう言ってたんだよ。

そんなに難しく考えることないんじゃないかな。写真なんて、撮りたいものを撮ればいいんだ。いいものが撮れたら、大切にしたいと思うだろう？

うしたら、アルバムに貼ればいい。プロはアルバムなんか作らないの。

君がもし真実を捕まえたなら、大切にしたいとは思わないのかな。

（カブトに）どうする？

せっかくだから、撮ってもらっちゃおうか。

待って待って！ どうしてそんなに簡単に気を許すんだ。校長先生の話をおぼれたのか？

でも、そんなに悪い人に見えないし。

記念写真なんて、きっかけに過ぎないんだよ。何枚か撮ってるうちに、こう言い出すんだ。自然な感じで撮りたいな。上着を脱いでみようか。

これ以上脱いだら、裸になっちゃいますよ。

それが向こうの狙いなんだよ。それから次に、こう言うぞ。君をモデルにし



ヤンマ  
クサナギ  
ヤンマ  
クサナギ  
カブト  
クサナギ  
ウラシマ  
カブト  
ウラシマ  
クサナギ  
三人  
ウラシマ  
アゲハ  
ウラシマ  
ヤンマ  
ウラシマ  
アゲハ  
ウラシマ  
三人  
ウラシマ  
アゲハ

て、撮ってみたいな。よかったら、僕のスタジオに来てくれないか。  
先生、やけに詳しいですね。

僕を疑って、どうするんだ。疑うなら、あの男を疑え。一枚くらいならいいよね。それが転落への第一歩なんだ。

一枚くらいならいいよね。

あーっ！（頭を抱える）

（ウラシマに）それじゃ、お願いします。（カメラを差し出す）

やめろ、カブト！ やめるんだ！

（カメラを受け取って）いいカメラだね。これ、本当に君のカメラ？

私のだって言ってるでしょう？

それじゃ、自然な感じで撮ろうね。

あーっ！（頭を抱える）

はい、チーズ。（思い思いのポーズで止まる）  
タイム。

（止まったままで）ねえ、早く撮ってよ。

自然な感じって言わなかったっけ？

（止まったままで）そんなこと言われても、ねえ。

お、君、なかなかかわいいね。

君って、誰よ。

それはもちろん、三人の中で一番伊藤つかさに似てる子。

（顔を見合せて）誰、その人？

（シャッターを切る）

あ！ 撮る時は、撮るって言ってよ！

ウラシマ (シヤッターを切る)  
カブト 一枚だけって言ったじゃないか！  
ウラシマ (シヤッターを切る)  
ヤンマ ちよつとちよつと、私も撮ってよ！  
カブト みんな、止まれ！

三人が止まる。

カブト どうだ。これなら、撮れないだろう。  
ヤンマ 私はまだ撮ってもらってないよ。(ウラシマに歩み寄る)  
ウラシマ (シヤッターを切る)  
カブト ヤンマ！  
ヤンマ、この時の写真は、もう現像したの？ 僕にも一枚、送ってくれないかな。  
カブト それが、送れないんです。  
ヤンマ どうして？  
ウラシマ 私たちは写ってなかったから。  
カブト わかった。フィルムが入ってなかったんだろう。昔のマンガによくあるパターンだ。  
ヤンマ フィルムは入ってました。  
カブト それなら、撮れてるはずだろう？  
ヤンマ やれやれ、これでどうやら、原稿用紙三枚に到達しましたね。  
カブト ちよつと待て。まだ、話の途中だぞ。

ヤンマ  
クサナギ

国語の先生には、しつかり三枚書いてあつたと伝えておいてください。中途半端なことをするなよ。三枚以上なら、四枚だって、五枚だって、いいはずじゃないか。

ヤンマ

それじゃ、体に気を付けて、俳優修行に勤しんでください。

クサナギ

そんなことはいいから、続きはどうなったの？

ヤンマ

くれぐれも、怪我だけはしないように。

クサナギ

怪我はもうしちやっただよ！

ヤンマ

有名になつたら、テレビのご対面のコーナーで会いましょう。それでは、さようなら。

クサナギ

こちらこちら！

ヤンマ

八月十四日、ヤマダミュキ。

クサナギ

ご対面のコーナーには、カブトとアゲハを呼ぼう。

クサナギが手紙を閉じる。

ウラシマ

あれ？

カブト

まさか、壊したの？

ウラシマ

ファイルがなくなつた。

カブト

あーあ、これ一本しかないのに。

ウラシマ

やつぱりカメラはいいね。この、シャッターを切る音が堪らないんだな。

アゲハ

プロって言うっても、いろいろあるでしょう？何を撮るプロなの？

ウラシマ

まあ、仕事だから、何でも撮るんだけど、専門は鳥。

アゲハ

鳥って、スズメとかカラスとか？

ウラシマ

違うよ。北海道へ行ってオオワシを撮ったり、沖縄へ行ってノグチゲラを撮

カブト

ったり。でも、これが全然、金にならないんだ。

ウラシマ

だから、アシスタントをやってるんだろう？

カブト

まあね。一本立ちできたら、好きな物を好きなだけ撮ろうって思ってたのに。

ウラシマ

お兄さん、名前は？

アゲハ

そうだな。ウラシマなんて、どうかかな？

ウラシマ

自分の名前でしよう？

ウラシマ

ウラシマだ。僕の名前は、ウラシマ。

ウラシマ・カブト・ヤンマ・アゲハが去る。

暗くなる。クサナギが机の上のスタンドを点ける。ハガキとペンを取り出して、手紙を書き始める。

駅長がやってくる。カンテラを左右に振る。カニタニ・サルサワ・ウスイケがやってくる。懐中電灯を左右に振る。駅長が去る。

そこへ、ナナコがやってくる。後を追って、ウラシマがやってくる。ナナコが木の陰に隠れる。ウラシマが去る。カニタニたちが木の陰を懐中電灯で照らす。ナナコが出てきて、カニタニに腕時計を渡す。ナナコが去る。

そこへ、ヤンマがやってくる。木の陰に隠れる。カニタニたちが木の陰を懐中電灯で照らす。モモヤマが出てきて、カニタニたちにカメラを向ける。フラッシュ。モモヤマが去る。

カニタニたちが懐中電灯を左右に振る。駅長がやってくる。カンテラを左右に振る。カニタニたちが去る。駅長も去る。

木の陰から、ヤンマが出てくる。そこへ、モモヤマがやってくる。ヤンマが逃げる。モモヤマがヤンマにカメラを向ける。フラッシュ。ヤンマが去る。

そこへ、ナナコがやってくる。ナナコがモモヤマに話しかける。モモヤマがナナコにカメラを向ける。フラッシュ。そこへ、ウラシマがやってくる。ナナコが去る。後を追って、ウラシマが去る。ムロマチ・アツチがやってくる。

アツチ

お帰り、モモヤマ君。こんな夜中にどちらへお出かけ？

モモヤマ  
アヅチ

ちよつとセブンイレブンまで、おでんを買いにいねえ、この暑いのに、おでんか。ちよつとおながが空いてたんだ。俺にも一つくれるかな。

ムロマチ  
モモヤマ

（モモヤマに）私は玉子がいいな。それから、昆布とつくねと大根と。それが生憎、みんな売り切れで。

ムロマチ

じゃ、はんぺんと竹輪とコンニャクでいいわ。

モモヤマ  
ムロマチ

それもみんな売り切れで。

アヅチ

（モモヤマのカメラを見て）お、これはカメラだね？

ムロマチ

（モモヤマに）最近のセブンイレブンじゃ、カメラをおでんの具にしてるの

モモヤマ

か。  
珍しいでしょう？　だから、思わず、買っちゃいました。

ムロマチ

モモヤマ君、嘘をついちゃいけないよ。

モモヤマ

どうして嘘だつてわかりました？

アヅチ

わからないわけないだろう！

ムロマチ

（モモヤマに）で、本当はどこに行ってきたの？

モモヤマ  
アヅチ

最近、運動不足だったんで、ジョギングに。

モモヤマ

ほう、どこまで？

ムロマチ

日本海まで。佐渡に横たわる天の川が見たくなくなって。

モモヤマ

モモヤマ君、嘘をついちゃいけないよ。

ムロマチ

先生は、僕の心が読めるんですか？

ムロマチ

君の心は平仮名よりも読みやすいからね。だから、今度は正直に答えなさい。そのカメラで何を写してきたの？

モモヤマ アツチ  
モモヤマ アツチ  
ムロマチ アツチ  
モモヤマ アツチ  
ムロマチ アツチ  
モモヤマ アツチ  
モモヤマ アツチ  
ムロマチ アツチ  
アツチ  
アツチ  
ムロマチ  
アツチ  
モモヤマ  
アツチ  
ムロマチ  
モモヤマ  
アツチ  
モモヤマ  
アツチ  
ムロマチ  
モモヤマ  
アツチ  
モモヤマ

正直に言うと、怒られるから。  
まさか、写しちゃういけないものを写してきたんじゃないだろうか？  
何だよ、写しちゃういけないものって。  
そりゃ、おまえ、写される方が「写さないで」って思うものだよ。  
本人の承諾は取らなかった。  
バカヤロー！ おまえは、いつも先生が言ってる言葉を忘れたのか？  
カメラは時として、人を傷つけることがある。それは、カメラで頭を殴ると  
痛いって意味じゃない。他人のプライバシーに、土足で踏み込むってことだ。  
（モモヤマに）カメラマンというのは、常に写される側の立場に立って行  
動しなくちゃいけないんだ。たとえば、おまえがお風呂に入っていると、  
他人に写されたらどうする。  
そいつがお風呂に入っていると、ところを写し返す。  
それじゃ、何の解決にもならないだろう！ いいか、モモヤマ。本人に無断  
で裸を撮るっていうのは、暴力に等しい行為なんだぞ。  
おまえは、僕が裸を撮ってきたって言うのか？  
こんな夜中に、他に撮るものがあるか。  
僕は、裸になんか、興味はない。  
嘘をつくな、嘘を。  
アツチ君、今のは嘘じゃない。  
先生は信じてくれるんですね？  
君にこんなに上手に嘘がつけるわけないからね。  
（モモヤマに）じゃ、何を撮ってきたって言うんだ。  
幽霊を。

アツチ 幽霊？

クサナギが風鈴を鳴らす。

アツチ キヤーツ！

ムロマチ モモヤマ君、君は幽霊なんか信じてるの？

アツチ (モモヤマに) おおおまえ、そそそれでも、プロプロのカメラマンか？

モモヤマ 先生はいつも言ってますよね？ 素人のカメラマンは事実を写し、プロのカ

メラマンは真実を写すって。

アツチ ゆゆ幽霊の、どどこが、しし真実なんだ。

モモヤマ 真実っていうのは、目に見えないものなんだ。しかし、その見えないものが、

フアインダーを通すと、一瞬見えることがある。(ムロマチに) その一瞬を

捕まえられるかどうか、写真の価値を決めるんでしよう？

アツチ しししかし。

ムロマチ アツチ君、ピントがずれてる。

アツチ はははい。(自分の頭を叩いて、モモヤマに) しかし、幽霊なんか撮ったつ

て、一銭にもならないだろう。

ムロマチ いや、アマチュアの中には、心靈写真で稼いでるヤツもいるらしいぞ。まあ、

モモヤマ 大抵は下手くそなトリック写真だけだ。

アツチ トリックじゃない写真だってあります。ただ、素人が撮った写真じゃ、テク

ニックの問題で、信用価値が低いです。

モモヤマ そこで、プロのおまえが撮ろうってわけか。

アツチ プロのカメラマンは、心靈写真なんてバカにするだろう？ それじゃ、いつ



アヅチ  
になつても、幽霊は子供のおもちやのままだ。  
とか何とか言っちゃって、本当はテレビに出て、「この丸の中に写ってます」  
ってやりたいんだろう。

モモヤマ  
僕は僕のカメラで、幽霊の存在を証明したいんだ。

ムロマチ  
とすると、そのフィルムの中には、幽霊の姿がバッチリ写ってるんだな？  
さあ。

ムロマチ  
何だよ、撮れなかったのか？

モモヤマ  
わかりません。白い人影を追いかけて、シャツターをバシバシ切ったんだけ  
ど、うまくカメラに入らなかったかどうか。

アヅチ  
白い人影？ そそそれじゃおまえ、ほぼ本物の、ゆゆ幽霊を見たのか？

ムロマチ  
（モモヤマに）現像してこい。今すぐ、現像してこい。  
モモヤマ  
はい！

モモヤマが走り去る。

アヅチ  
うう写ってますかね、ゆゆ幽霊？

ムロマチ  
バカ。幽霊っていうのは物質じゃない。精神的な存在なんだ。カメラは物質

アヅチ  
に反射した光を捉える。精神が光を反射するか？

ムロマチ  
ということは、もし幽霊が存在するとしても、写真には写せないんだ。  
写真に写った幽霊は、写ったという時点で偽物なんだ。

モモヤマが走ってくる。手には、数葉の写真。

モモヤマ  
ムロマチ  
モモヤマ  
ムロマチ  
モモヤマ  
ムロマチ  
アツチ  
ムロマチ  
アツチ  
モモヤマ  
アツチ  
モモヤマ  
ムロマチ  
モモヤマ  
ムロマチ  
モモヤマ  
ムロマチ

現像できました！

よし、見せてみる。(モモヤマの手から写真を取る)

どうです？ ちゃんと写ってたでしょう？

確かに人影が写ってるね。白いブラウスに、黒っぽいスカート。これはまだ

子供だな。

中学生の幽霊です。

どうしてそんなことがわかるんだよ。

だって、これを撮ったのは、すぐその中学だから。

カズコが通ってる中学か？

カズコ君から聞いてませんか？ あの中学には、毎年夏になると、幽霊が出る

んです。僕はセブイレブンのおぼさんに聞いて、七月の末から毎晩張り

込んでたんですが、ついにプールの近くで。

うわあっ！

どうした？

こここれなんか、さき三人も写ってます！

あ、それは別だ。その三人は、僕と同じで、幽霊を待ち伏せしてたんだ。

おまえみたいな物好きが、他にもいたのか。

僕が幽霊を追いかけたたら、今度はこの三人が僕を追いかけてきたんだ。僕

を幽霊だと思っただらうな。だから、お返しにパチリ。

ということは、この子は幽霊で、この三人は生きてる人間か。

そういうことになります。

どこが違うんだ？

そんなの簡単じゃないですか。三人は僕を追いかけてきたのに、この子だけ

アヅチ  
ムロマチ

は僕から逃げた。何か、疚しいことがあったんです。夜中にカメラを持った不審な男に出会ったんだ。逃げたくもなるだろう。それだけじゃ、この子が幽霊だって証拠にはならないな。大体この子、どこかで見えたような気がする。

モモヤマ

先生の中学時代の同級生じゃないですか？ 失恋を苦にして、校舎の屋上から投身自殺した子ですよ。

ムロマチ

そんな同級生はいない。

アヅチ

おい、この最後の一枚はなんだ。これだけ、明るい場所で撮ってるな。ああ、それも別だ。帰りに、校門の前で、女の子に会って。

モモヤマ

その子も中学生か？ いや、歳は僕と同じぐらいかな。「白い服の男は来なかった？」とか、「中学生は見なかったか？」とか、しつこくつきまとってきて。

アヅチ

それで撮ったのか。あんまりしつこいから、フラッシュで脅かしてやったんだ。どうだ？ 凄いや、顔で写ってるだろう？

ムロマチ

おめでとう、モモヤマ君。

モモヤマ

は？

ムロマチ

とうとう君は真実を写したんだ。この最後の一枚で。最後の一枚って、まさか。街灯に照らされた校門ばかりで、女の子の姿はどこにもない。

ムロマチ・アヅチ・モモヤマが去る。

郵便屋が自転車に乗って、やってくる。

郵便屋

クサナギさん、郵便です。

クサナギ

ちようどいい時に来てくれました。今、ヤンマに返事を書いているところなんだ。もうすぐ書き終わるから、ついでに持ってつてくれない？

郵便屋

あんまり時間がないんですけど。

クサナギ

大丈夫大丈夫、そんなに待たせやしないから。見てごらん。住所も書いた、名前も書いた、その上なんと、郵便番号まで書いてある。後は中身を書くだ

けなんだから。

郵便屋

すみませんけど、先を急いでるんで。

クサナギ

薄情者！

郵便屋

は？

クサナギ

足の悪い人間に、ポストまで歩いていけつて言うのか？

郵便屋

それじゃ、また明日来た時に持っていきますから。

郵便屋が歩き出す。後を追って、クサナギが松葉杖で走る。

クサナギ

明日じゃなくて、今日出したいんだよ。

郵便屋が逃げる。後を追って、クサナギが松葉杖で走る。

クサナギ

郵便屋

クサナギ

郵便屋

クサナギ

郵便屋

クサナギ

郵便屋

クサナギ

郵便屋

クサナギ

郵便屋

クサナギ

郵便屋

クサナギ

郵便屋

クサナギ

郵便屋

クサナギ

郵便屋

クサナギ

聞いてるのか？ 僕は今日出したいって言ったんだ。ずいぶん元氣じゃないですか。

もうダメ。もう一步も動けない。

それじゃ、また明日。

手紙の続きが読みたんだよ。すぐ書いて送れって、ヤンマに伝えたいんだ。続きって、これのことかな。(封筒を取り出す)

僕宛の手紙じゃないか。貴様、配達しないで、そのまま持ち帰ろうとしたな？ 忘れてたんですよ。あなたが変なことを言うから。

そうか、やっぱり郵便局の仕業だったのか。一週間も遅れるなんて、どうもおかしいと思つたら、貴様が隠してたんだな？

誤解ですよ。この手紙は、今朝着いたばかりのやつで。

よこせ。その手紙をよこせ。

そんな言い方をしなくても、あげますよ。はい。(封筒を差し出す)

(受け取って)オオシマアゲハ？ 今度はアゲハからだ。

また生徒さんからですか？

違う。僕が待ってたのは、こんなやつの手紙じゃない。

一体誰の手紙を待ってるんですか？

仕事の関係だよ。

そう言えば、あなた、何の仕事をしてるんですか？ 毎日、こんな時間に家でブラブラしてて、生活の方は大丈夫なんですか？

僕だって、仕事はしたいよ。でも、この足じゃ、怪我人の役しかできないだ

ろう？

郵便屋 え？ あなた、俳優さんなんですか？

クサナギ アクターって言うてくれないか？

郵便屋 どうせ、刑事ドラマの犯人役とかが専門なんでしょう？

クサナギ 犯人だけじゃないよ。被害者だって、やったことあるよ。

郵便屋 つまり、あなたは、怪我が治ってからやる仕事を探していて、その採用通知

クサナギ を待ってるわけだ。

郵便屋 どうしてわかった？

クサナギ 言ったでしょう？ 僕は手紙のプロだって。

郵便屋 とにかく、こんな喧しいやつの手紙なんか、ほしくないんだ。担任だった半

クサナギ 年間、こいつの声にどれだけ苦しめられてきたことか。昨日のヤンマが八十

郵便屋 ホーンなら、このアゲハは百ホーン。二日酔いで授業してると、頭にガンガ

クサナギ ン響くんだ。

郵便屋 二日酔いで授業をしたんですか？

クサナギ そりゃ、先生だって人間なもの、お酒くらい飲むよ。うるさいやつにはとび

郵便屋 つきり難しい質問をするし、かわいい子には十点でも二十点でもサービスし

クサナギ ちやう。

郵便屋 失礼します。

クサナギ もう帰っちゃうの？ 麦茶、昨日からずっと冷やしてるんだよ。

郵便屋 仕事をサボるわけにはいかないうって言ったでしょう？

クサナギ 今日はね、ビールも冷やしてるんだよ。

郵便屋 ひいきをする先生の酒は、飲みたくありません。

郵便屋が自転車に乗って、去る。

クサナギ

何だか嫌われちゃったみたいだな。友達になりたかったのに。仕事もしないで毎日ブラブラしてると、まじめに働いてる人が眩しく見えます。僕も先生をやってる時は、毎朝七時に起きて、八時半には教壇に立ってました。あの時の僕は、彼みたいに眩しかったのかな。そんな時に届いた手紙。

クサナギが手紙を開く。

クサナギ

「暑中お見舞い申し上げます。ハイ、クサナギ先生、元気？」。元気じゃない。「私は前から夏やせっていうのに憧れてて、夏やせするには暴飲暴食が一番だっていうから、スイカとかかき氷とか、二人前三人前って食べたのに、ちっとも効果がありません」。そんなに食べたなら、かえって太るだろう。「だから、最近では体重計が怖くて、お風呂に入るたびに目に入ってイヤだから、廃品回収に出してしまいました。何も知らないママは、『どこにしまっただかしら』って、家中探し回ってます。ママ、ごめんね」。こういう無責任なところは全然変わってない。「ヤンマの手紙、もう読みましたか？ 昨日出したって言ってたから、この手紙より一日早く着いたでしょう？ 『なんでクサナギ先生なんかに出したの？ 好きだったの？』って聞いたら、『教師より、元教師の方がマシだから』って言うてました」。マシとはなんだ、マシとは。「私もそれには同感なので、こうして手紙を書いているのです。だから、変な誤解はしないでね」。そんなもの、してたまるか！

別の場所に、アゲハが現れる。

アゲハ

クサナギ先生が主役をやるとは思いませんでした。まさか、一度やってみたかったんだよ、ロミオの役は。

クサナギ

アゲハ

次に思い出すのは、作文の授業。「テーマは自由だ。何でも好きなことを書いていいぞ」って言って、後は自分の机で居眠り。

クサナギ

アゲハ

あの日は体調が悪くてね。どうしても立ってられなかったんだ。確かに、顔が土気色でしたね。近くに寄ると、お酒の匂いがプーン。バレてたのね。

アゲハ

そのくせ、作文を返す時は、文句ばかり。「好きなことを書いていい」って言ったくせに、「おまえの考え方は間違ってる」って。

クサナギ

アゲハ

仕方ないだろう。君たちが非常識なことばかり書くから。非常識は先生の方でしょう？ 雑談しない先生は肩が凝って困るけど、雑談

しからない先生はもっと困るんだから。テレビとか映画の話ばかりして、「僕は先生より俳優になりたいんだ」って、顔に書いてありました。

クサナギ

アゲハ

それもバレてたのね。なんて書いてると、また「間違ってる」って言われるから、話題を変えます。それではヤンマの真似をして、今日の出来事、行ってみようか！

カブト・ヤンマが飛び出す。後を追って、アオタ先生・カニタニ・サルサワ・ウスイケが飛び出す。



アオタ先生 ヤマダ、おまえの気持ちはよくわかった。やっぱり、おまえは先生が嫌いなんだ。

ヤンマ また私を疑うんですか？

アオタ先生 他に誰がやるって言うんだ。

カニタニ ヤマダさん、あなたには前科があるのよ。まず最初に疑われて当然でしょう？

アゲハ 前科って何よ。そんな言い方、失礼じゃない？

カブト (カニタニに) ヤンマはちゃんとプール掃除をして、罪を償ったんだぞ。

カニタニ でも、全然反省してなかったじゃない。あなた、一度でも先生に謝った？

サルサワ (カブトに) アオタ先生ったら、またいきなり飛び込んで、昨日より

アゲハ もっとひどい怪我をしたのよ。

ウスイケ そう言えば、包帯の数が大分増えてる。

アオタ先生 どうせまたやるんじゃないかと思っただのよね。だから、昨夜はプールに張り

ウスイケ 込んで。

アオタ先生 おまえたち、夜中に学校に来たのか？

ウスイケ 八時頃から、三人で更衣室に隠れてたんです。ヤマダさんが来るんじゃない

アオタ先生 かと思つて。

カニタニ それで、何か見たのか？

アオタ先生 (腕時計を示して) 十二時頃、校舎の裏から黒い影がスーッと現れたから、

カニタニ 「そら、捕まえろ！」って追いかけたんです。校庭の隅に追い詰めて、懐中

アオタ先生 電灯で照らそうとした瞬間にピカリ！

サルサワ ピカリ？

アオタ先生 カメラを持ってたんですよ。

ウスイケ (アオタ先生に) 目の前が真っ白になっちゃって、その隙に逃げられました。

カニタニ

ムロマチさん、あなたがカメラを貸したんでしょう？ やっぱり、あなたたち、共犯なんじゃない。

ヤンマ

カニタニ

それは私じゃないよ。  
まだ言い逃れするつもり？

ヤンマ

アオタ先生

確かに、私はプールの水を抜いたけど――

ヤンマ

何？  
（カニタニに）カメラは持って行かなかった。その人、私を追いかけたのよ。

カニタニ

アゲハ

何言ってるの。あんたを追いかけたのは、私たちよ。  
わかった。カニタニさんたちが追いかけたのはカメラを持った誰かで、その誰かが追いかけてたのがヤンマなのよ。

サルサワ

アゲハ

その誰かって、誰よ。  
さあ。

アオタ先生

ウスイケ

先生には大体見当がついている。

アオタ先生

六人

誰なんですか？  
幽霊。  
幽霊？

クサナギがシンバルを鳴らす。

カニタニ  
アオタ先生

キヤーツ！  
おまえたち、聞いてないのか？ この学校はな、毎年今頃になると、幽霊が出るんだ。それも、一人や二人じゃない。

カブト  
アオタ先生  
カニタニ  
サルスワ  
ウスイケ  
でも、幽霊がカメラなんか持つてるかな。  
ピカリと光ったのは、カメラのフラッシュじゃないかもしれない。  
他に光るものって言ったら、ホタル？  
花火？  
ひとだま？

クサナギが木魚を鳴らす。

カニタニ  
アゲハ  
カニタニ  
アゲハ  
アオタ先生  
ヤンマ  
アオタ先生  
カニタニ  
カブト  
カニタニ  
アゲハ  
アゲハ  
キヤーツ！  
凄え！私、一度でいいから、ひとだまって見てみたかったんだ。  
おまえ、怖くないのか？  
どうして怖いのか？別に、襲いかかってきて、全身大火傷ってことにはならないでしょう？  
まあ、おまえたちも命に別状がなくてよかった。ところで、ヤマダ、幽霊の話が始まる前に、何か言わなかった？  
言いましたっけ？  
確か、プールの水を抜いたのは自分だって。  
ヤマダさん、再犯の罪は重いよ。  
（アオタ先生に）でも、プールは昨日、掃除したばかりですよ。  
トイレの掃除はしなかったでしょう？  
よかった。トイレだけなら、十五分で終わるよ。  
十五分じゃ無理よ。うちの学校のトイレは十カ所もあるのよ。  
それ、全部やれって言うの？

カニタニ

自業自得よ。女子トイレだけじゃなくて、男子トイレもやるのよ。職員トイレもやるのよ。(腕時計を示して)全部終わるのは、夜中の十二時ね。

アオタ先生

カニタニ、おまえが判決を下すな。今日はトイレ掃除じゃなくて、図書室の整理をせよ。ミドリ先生のお手伝いだ。

カニタニ

そんなの、昨日より楽じゃないですか。図書室っていうのは、昼でも暗いし、空気もひんやりしてるだろう。

アオタ先生

幽霊の好きそうな場所ですね。日が暮れるまでに終わらせないと、ご対面ことになるわね。

ウスイケ

サルサワ

いいわよ。私はご対面したいんだから。オオシマ、ミドリ先生に会ったら、こう言うんだ。「アオタ先生の命令で来ました。奴隷だと思つて、好きに使ってください」つて。

アゲハ

カニタニ

生徒を奴隷呼びわりするなんて、それでも教師？

アオタ先生

(アオタ先生に)私たちはまたバスケットですね？ いや、今日はグラウンドに行つて、野球をやるう。おまえたちに、本物の千本ノックを体験させてやる。よし、行くぞ。

アオタ先生・カニタニ・サルサワ・ウスイケが去る。

クサナギ

「たとえアオタ先生の点数稼ぎだって、プール掃除よりはマシです。もともと図書室は大好きだし、幽霊にも会いたいと思っていたので、今日もヤンマに付き合うことにしました」

そこへ、ミドリ先生がやってくる。エプロンをしている。

ミドリ先生 ちよつと、あなたたち、運ぶのを手伝ってちょうだい。

ミドリ先生が去る。後を追って、カブト・ヤンマ・アゲハが去る。

クサナギ

「ミドリ先生は大張り切りで、『三人も手伝ってくれるなら、書庫の奥の方に溜まっている本を、まとめて整理しちゃいましょう』って、私たちを扱き使います。この先生はとっても仕事熱心なんだけど、ひたすらマイペースなので、合わせるのが大変です」。そうは言うけどね、こっちだって、生徒に合わせるのは大変なんだよ。特に、君たちみたいな生徒は。

ミドリ先生・カブト・ヤンマ・アゲハが戻ってくる。手にはたくさんの本。後から、ナコもついてくる。

カブト  
ミドリ先生

カブト

アゲハ

カブト

アゲハ

カブト

ヤンマ

アゲハ

カブト

アゲハ

カブト

アゲハ

カブト

アゲハ

ミドリ先生

ナナコ

カブト

アゲハ

カブト

先生、これ、全部、捨てちゃっていいんですか？

まさか。そんなもったいないことをしたら、もったいないおぼけが出るわよ。おぼけの話はもうやめましょう。

何よ、カブト、怖いのか？

怖いんじゃない、私は幽霊の存在なんて認めないの。

あんたが認めなくて、私は幽霊の存在するんだから、仕方ないでしょう？

存在するもんか。幽霊なんて、出るかもしれない、出たらどうしようって思うから出るんだ。錯覚なんだよ。

それじゃ、あの写真はどうなるわけ？

写真て？

（ヤンマに）バカ！ アゲハの前で言うなって言ったのに。

何よ、私に隠し事？ 二人だけの秘密で、私は仲間外れ？

別に秘密じゃないけどさ、アゲハに言うのと、話が変に盛り上がり上がったから。

私、帰る。二学期に教室で会っても、話しかけないでよね。

わかったわかった。ちゃんと話すから、怒るなよ。ただし、絶対に誰にも言

わないこと。

約束する。

（カブトに）先生も約束する。

（カブトに）私も。

昨日、プールで掃除をしてる時、写真を撮ったよな？ あれから、家に帰っ

て、現像したんだけど、何だかおかしいんだ。

おかしいって？ 何にも写ってないんだよ。私もヤンマもアゲハも、それにあのウラシマって

人も。

ミドリ先生

カメラのキャップがつけっぱなしだったんでしょ？

カブト

そんな素人みたいな失敗はしません。見てください。(写真を差し出して)

ミドリ先生

これは、私がウラシマさんを撮ったやつなんですけど。

ヤンマ

プールと空と、あの木だけ。

ミドリ先生

ウラシマさんだけ写ってないんです。

ヤンマ

昨日、プール掃除をしてたら、いきなり現れて。本人は、プロのカメラマン

アゲハ

だって言ってたけど。

カブト

こっちの写真は？

アゲハ

ウラシマさんが撮ったやつ。こっちはもっとおかしいんだ。

アゲハ

私たちが写ってない。プロだなんて威張っておいて、全部失敗してるじゃない。

ヤンマ

それより、もっと重大なことに気がつかない？

アゲハ

プールが写ってない！

カブト

校庭と校舎と、あの木だけ。プールで撮ったのに、プールが写ってないんだ。

ミドリ先生

でも、これ、確かに、うちの学校よ。

ヤンマ

先生、うちの学校のプールは、何年前にできたんですか？

ミドリ先生

わりと新しいのよ。まだ十年ぐらいしか経ってないんじゃないかな。

アゲハ

ということは、この写真に写ってるのは、十年以上前の景色？

クサナギが机を叩く。

クサナギ

アゲハ

クサナギ

アゲハ

クサナギ

アゲハ

ヤンマ

アゲハ

クサナギ

アゲハ

クサナギ

ミドリ先生

カブト

ナナコ

アゲハ

ナナコ

ミドリ先生

ヤンマ

ミドリ先生

ミドリ先生

ミドリ先生

ミドリ先生

こら、アゲハ！ 調子に乗って、デタラメを書くんじゃない！

私はただ、先生の言った通りに――

確かに、僕は、思ったことを思った通りに書いて言ったよ。だからって、

ありもしないことを思うんじゃない。

そう言うだろうと思つて、問題の写真を同封しました。見てください。

（封筒から写真を出して）本当だ。

（ミドリ先生に）ということは、十年以上前の景色を写せるウラシマさんは、

十年以上前の人間なのよ。

だから、カブトの写真には写ってないんだ。

つまり、ウラシマさんは、現実には存在しない人間なんだな。

（ミドリ先生に）ということは。

幽霊？

キヤーツ！

（アゲハに）それは私も考えた。でもさ、ウラシマさんには足もあつたし、

幽霊にしちややけにのんきだったし、第一、昼間からのこのこ現れるかね？

幽霊は夜しか現れないなんて、ただの迷信よ。

でも、幽霊は星と同じで、太陽の光の下では見えないんじゃないの？

それが迷信だつて言うの。太陽だつて星の一種じゃない。問題は、その星が

近くにあるか遠くにあるかつてことなの。幽霊だつて、近くにいたら、昼間

でも見えるのよ。

校長先生にも見えたそうよ。

昼間に出了んですか？

昨日、校長室で仕事をしてて、お昼にお寿司を取ったんだつて。で、食べる



アゲハ  
カブト  
ヤンマ  
ナナコ  
ヤンマ  
ナナコ  
カブト  
ナナコ  
ヤンマ  
カブト  
ナナコ  
アゲハ  
ナナコ

前にトイレで手を洗って、戻ってきたら、ウニがなくなっていたの。「アオタのやつ、またやりやがったな」と思っ、隣の職員室へ行ったんだけど、誰もいなかった。諦めて、校長室に戻ると、今度はトロもイクラも甘エビもない。残ったのは、ガリだけ。もう完全に頭に落ちちゃって、「アオタ！」って怒鳴りながら、廊下に飛び出した。すると、十人ぐらい白い人影が、廊下の向こうへ走っていきながら、「ごちそうさま」って。

やつぱり、この学校は幽霊の名所なんだ。

とんでもない学校に入学してしまった。

でもさ、いくら名所だって、ちよつと数が多すぎない？

しようがないのよ、駅だから。

駅？  
死んだ人はここに集まって、みんなと一緒に天国へ行くの。

どうしてこの学校から？

人がたくさん集まれる場所って言ったたら、学校とか公園ぐらいしかないでしょう？

駅って呼ぶのはどうして？

（ナナコに）まさか、ここから銀河鉄道に乗って、天国へ行くっていうんじゃないよね？

それじゃ、まるで童話よね？ でも、それが事実なの。

嘘だ。丹波哲郎の話と違う。

あの人はまだ死んでないから、知らないのよ。

じゃ、どうしてあんたは知ってるのよ。

私は、この本を読んだから。（と本を差し出す）

アゲハ  
ミドリ先生

（受け取って）これに、銀河鉄道のことを書いてあるの？  
（受け取って）聞いたことのない題名ね。こんなの、うちの図書室にあったかしら。

そこへ、アオタ先生がやってくる。

アオタ先生

ヤマダ、ミドリ先生にまで、ご迷惑をかけてないだろうな？

ヤンマ

まじめに仕事しますよ。

アオタ先生

本当ですか、ミドリ先生？

ミドリ先生

ええ。

ヤンマ

ミドリ先生の言うことは信じて、私の言うことは信じないんだから。

アオタ先生

おまえがそんなことを言える立場か？ プールの水を二度も抜いておいて。

ヤンマ

今日は覚悟して、家に帰るんだな。

アオタ先生

まさか、家に電話したの？

アオタ先生

俺が言っても反省しないんだ。お母さんに言ってもらうしかないだろう。

アゲハ

ひどい。お母さんは関係ないでしょう？

アオタ先生

生徒の転落を食い止めるには、学校と家庭ががちりスクラムを組むことが

ミドリ先生

大切なんだ。そうですね、ミドリ先生？

アゲハ

（アオタ先生に）転落なんかしてないじゃない。

アオタ先生

自覚のないところがますます心配だ。おまえの家にも電話しておいてよかつた。

アゲハ

私の家にもしたの？

カブト

(アオタ先生に) それじゃ、私の家にも? あーあ、帰ったら、またゲンコツだ。

アオタ先生

すばらしい。今時、子供を殴る親なんて、なかなかいないぞ。それだけ、おまえはお母さんに愛されてるんだ。そうですね、ミドリ先生?

ミドリ先生

ええ。お仕事の方はまだしばらくかかりそうですか? 僕はそろそろ帰ろうかと思

アオタ先生

ままだしばらくかかりそうです。

ミドリ先生

もつと生徒をよこしましょうか? パツパと片づけて、ビールでも飲みに行

アオタ先生

きましよう。いいえ、四人も手伝ってくれて、大助かりです。これ以上、人手が増えても。

ミドリ先生

四人? 僕がよこしたのは、三人だけです。でも、ヤマダさんと、オオシマさんと、ムロマチさんと。

五人がナナコを見る。

クサナギ

誰だ、その女は!

ミドリ先生

(ナナコに) そう言えば、あなたはどちらの方でしたっけ?

ヤンマ

先生の知り合いじゃないの? (ナナコに) お会いするのは初めてですよ?

ナナコ

ええ。おまえは一体何者だ!

クサナギ

うるさいなあ。少し黙っててよ。

アゲハ

クサナギ  
ナナコ

だって、アゲハ、もしかしたら、そいつは、君が前から会いたがって——  
(ミドリ先生に)この学校の卒業生です。図書室が懐かしくて、フラッと覗いてみたら、皆さんが忙しそうにしてたんで、何か手伝うことはないかなと思つて。

ミドリ先生

なんだ、卒業生ですか。それならそうと云つてくださいよ。

アゲハ

知らない間に仲間に入つてたから、座敷童子かと思つちやつた。

カブト

アゲハ!

ミドリ先生

私はまた、校長先生に手を振つたうちの一人じゃないかつて。

カブト

先生!

ミドリ先生

怖がることないでしょう、ムロマチさん。こんなに明るい幽霊がいるわけないじゃない。

ナナコ

ムロマチ?(カブトに)あなた、ムロマチつて名前なの?

ミドリ先生

そうですよ。それがどうかしましたか?

ナナコ

ううん、別に。

そこへ、ウラシマがやってくる。

ウラシマ

ナナコ君、こんな所で何をしてるのかな?

ナナコ

ミドリ先生のお手伝い。ほら、私つて、困つてる人を見ると、放っておけないタチだから。

ウラシマ

ふーん。で、僕とした約束は?

ナナコ

約束つて?

ウラシマ

とぼけるなよ。昨日、おまえはなんて言つた? 「明日、必ず一緒に行く」つ

ミドリ先生  
カブト  
ミドリ先生  
アオタ先生

て言っただろう？ ほら、来いよ。  
あの、あなたも卒業生ですか？  
違いますよ。この人が、さつき話したウラシマさん。  
キヤーツ！ でも、そんなふうには見えないわね。  
（ウラシマに）君君、用もないのに、学校の中をブラブラされちゃ困るんだ  
よ。

ウラシマ

いや、僕は彼女を探しに来ただけで。あれ？

ナナコ

（黙って、逃げようとしている）

ウラシマ

ナナコ君、どこへ行くのかな？  
家に帰る。一応、お父さんとお母さんに挨拶してこないと。

ナナコ

おかしいな。家には昨日帰ったって言ってなかったっけ？

ウラシマ

昨日は窓から覗くだけで、中に入らなかつたの。だって、お父さんの頭を見

ナナコ

て、ビククリしたんだもん。すっかりハゲちやつて。

ウラシマ

仕方ないだろう。あれから、十五年も経ったんだから。

ナナコ

だから、今日は勇気を出して、声をかけてみる。「お父さん、その髪形、素

ウラシマ

敵よ」って。

ウラシマ

その前に、約束を守れよ。ナナコ！

ナナコが走り去る。後を追って、ウラシマが走り去る。

カブト

今、十五年って言ったよな？

ヤンマ

ということは、ウラシマさんは十五年前に死んだの？

アゲハ

ウラシマさんだけじゃない。今の、ナナコって人もよ。

アオタ先生 ミドリ先生、こいつら、一体何の話をしてるんです。  
ミドリ先生 オオシマさん、もしかして、今のナナコって人も。  
アゲハ そうです。幽霊だったんです。

カブト・ヤンマ・アゲハ・ミドリ先生・アオタ先生が去る。

クサナギ

こら、アゲハ。君は幽霊に会いたかったから、そう思うんだよ。大した証拠もないのに、幽霊だって決めつけたら、失礼じゃないか。ウラシマさんは超能力者だったんだ。だから、あの写真は、念写で写したんだな。それから、ナナコは子供の頃に、UFOに連れ去られたんだ。それで、十五年ぶりに帰ってきたんだ。ほら、見る。全く別の説明だってできるだろう？ 二人が幽霊だって説明するより、よっぽど説得力がないじゃないか。あーっ！ やっぱり、幽霊は存在するんだ。そう言えば、昨夜、玄関の方で変な音がしたなまさか。お母さん！

クサナギが走り去る。

ナナコがやってくる。木の陰に隠れる。ウラシマがやってくる。周囲を見回し、去る。ナナコが木の陰から出る。笑う。と、ウラシマが戻ってくる。ナナコが走り去る。後を追って、ウラシマも走り去る。ムロマチ・アヅチ・モモヤマがやってくる。

ムロマチ

モモヤマ

ムロマチ

モモヤマ

ムロマチ

アヅチ

ムロマチ

モモヤマ

アヅチ

ムロマチ

モモヤマ

アヅチ

ムロマチ

モモヤマ

太陽は沈んだか。

たった今、西のビルの谷間に。

天には星一つなく、地には風一つない。まさに、絶好の幽霊日和だな。

でも、まだ昼の光が残ってますよ。こんな時間に出ますかね。

「黄昏は逢魔の時間」と言うだろう。昼でも夜でもない薄暗闇は、人の心を

惑わせる。人を惑わせたい幽霊なら、黙って隠れていられるわけがない。

せせ先生、やややつぱり、かか帰りましょう。

アヅチ君、スタジオを出る時の勢いはどうしたの？

(アヅチに)俺は俺のカメラで、幽霊が存在しないことを証明してやるって、

意気込んでたじゃないか。

幽霊の正体見たり枯尾花。おまえが会った女の子だって、幽霊なんかじゃない。

い。シャッターを切る直前に、ササッて動いたに違いないんだ。

そんなに敏捷そうには見えなかったけど。

でも、冷静になつて、考えてみる。その子がただの人間だって証明できても、

それだけじゃ、幽霊一般の存在を否定することはできない。

モモヤマ

アヅチ

ムロマチ

アヅチ

ムロマチ

モモヤマ

それは、僕も同じだ。あの子が本物の幽霊なら、何回シャッターを切っても、写真には写らない。僕のカメラじゃ、あの子の存在は証明できないんだ。プロのカメラマンが、心霊写真をバカにする理由がわかったぞ。カメラじゃ、幽霊に歯が立たないからだ。しかし、カメラには真実を写す力がある。そう言いながら、先生はカメラを持ってきてないじゃないですか。カメラマンはいつも二つのカメラを持っている。一つ目のカメラで歯が立たないなら、二つ目のカメラで立ち向かうしかない。二つ目のカメラって？ シャッターは瞼、フィルムは網膜、心に焼き付けた真実は、写真以上の真実だ。でも、それをどうやって人に見せるんですか？

ムロマチ・アヅチ・モモヤマが走り去る。カニタニ・サルサワ・ウスイケがやってくる。

カニタニ

サルサワ

カニタニ

ウスイケ

カニタニ

太陽は沈んだか。  
たった今、西のビルの谷間に。  
よし、帰ろう。  
ちよつとちよつと、ヤマダさんを待つんじゃないか？  
（腕時計を示して）こんな早い時間に来るわけないだろう？ 昨夜だって、十二時過ぎてから来たじゃないか。  
それなら、十二時まで待とうよ。  
これ以上待ったら、真っ暗になっちゃうじゃないか。



ウスイケ  
カニタニ

サルサワ

ウスイケ  
カニタニ  
ウスイケ  
カニタニ  
サルサワ

カニタニ  
サルサワ  
ウスイケ  
カニタニ  
ウスイケ

懐中電灯があるじゃない。

バカだな、おまえは。ホラー映画とか、見たことないのか？ 幽霊っていうのは、懐中電灯を向けた方には絶対に見えないの。必ず反対側について、ふうつて安心して振り返るのを待ってるんだよ。

（ウスイケに）それに、もし運良く幽霊を照らしたとするよ。照らされた幽霊がこつちを見る。それから、どうするの？ 懐中電灯で戦うわけにはいかないでしょう？

それじゃ、ヤマダさんが水を抜くのを、黙って見過ごすの？

今夜は来ないよ。あいつだって、幽霊は怖いはずだ。

ヤマダさんのかわりに、オオシマさんが来るかもしれない。

あのバカ、大喜びで来そうだな。

そうやって、毎日水を抜かれたら、補習も毎日延期になって、夏休みが終わっちゃうよ。

そんな夏休み、イヤだ！

おもしろくも何ともないじゃない。

中学二年の夏休みは、一番危険じゃないか？

幽霊が出たら、危険だね。

ウスイケさん、後はよろしく。

私、毎日補習でもいい！

カニタニ・サルサワ・ウスイケが走り去る。ナナコがやってくる。と、ウラシマが木の陰から出てきて、ナナコの前に立ち塞がる。

ウラシマ  
ナナコ  
ウラシマ  
ナナコ  
ウラシマ  
ナナコ  
ウラシマ  
ナナコ  
ウラシマ  
ナナコ

そこへ、  
駅長がやってくる。

駅長  
ナナコ  
駅長  
ウラシマ  
駅長  
ウラシマ  
ナナコ  
ウラシマ

ナナコ君、今まで、どこに行つてたのかな？  
言つたでしょう？ 自分の家。  
ふーん。で、お父さんに挨拶はできたのか？  
そうしようとは思つたんだけど、やっぱり、声をかけられなかった。  
どうして？  
だつて、いきなり娘の幽霊が出てきたら、心臓麻痺を起こすかもしれないし。  
しかも、死んでから、十五年も経つてゐるしな。  
みんな、変わつちやつてるのよね。私のことなんか、覚えてないみたい。  
浦島太郎の気分だろう？ でも、僕らは覚えてる。  
私たちにとっては、たったの十五日前なのに。でも、どうして？

列車に乗る前に、説明を受けたでしょう？  
あの、あなたは？  
この駅の駅長です。天上と地上では、時間の流れが全く違う。この話は、出  
発する前に、天上駅の駅長が説明したはずですが。  
それがその、僕らは窓から乗り込んだんで。  
まさか、切符を持たないで？  
どうしても降りたかつたんです。帰つて、話をしたい人がいたから。  
私は、話をしても無駄だと思ふな。会いに行つても、怖がられるだけよ。  
そのことについては、ちゃんと考えてある。なるべく爽やかな顔をして、何  
気なく話しかけるのさ。「やあ、久しぶり」。

ナナコ  
ウラシマ

かえって、不気味じゃないかな。そう思う前に、話をするのさ。「僕は別に何の恨みも持ってません。どうしても話したいことがあって、戻ってきたんです」。

ナナコ

何を言っても、聞いてもらえないんじゃないかな。アカネさん、きつと怒ってるだろうし。

ウラシマ

当たり前だろう？ 自分の亭主が、知らない女と二人で死んだんだ。

ナナコ

普通の人なら、浮気してたって思うでしょうね。

ウラシマ

でも、それは誤解じゃないか。たとえ許してもらえなくても、話だけはしなくちゃ。

駅長

だったら、急いだ方がいい。帰りの列車は、明日の夜に出発します。その列車に乗り遅れると、二度と天上には戻れませんよ。

ウラシマ

ナナコ、頼む。

ウラシマ

私は行かない方がいいと思う。

ナナコ

せっかくここまで戻ってきたのに。

ウラシマ

自分勝手はやめなさい。あんたはアカネさんにとって、一番会いたくない人なのよ。

ウラシマ

それは違うな。僕は二番で、一番はナナコだろう。

ナナコ

だから、逃げるのよ。

ウラシマ

ナナコ！

ナナコ・ウラシマが走り去る。反対側へ、駅長が去る。カニタニ・サルサワ・ウスイケがやってくる。後を追って、モモヤマがやってくる。

モモヤマ  
カニタニ  
モモヤマ  
カニタニ  
モモヤマ  
カニタニ  
モモヤマ  
カニタニ  
モモヤマ  
カニタニ  
モモヤマ  
カニタニ  
モモヤマ  
カニタニ  
モモヤマ  
カニタニ  
モモヤマ  
カニタニ

違うよ違うよ。僕は幽霊じゃないよ。

幽霊じゃなかったら、何よ。

僕はモモヤマと言いまして、この近くに住んでる――

変質者？

違うよ違うよ。このカメラを見てくれよ。

カメラ？

（フラッシュをたいて）昨夜もここで会ったろう？ 君たちに追いかけられ

て、今みたい。

それじゃ、昨日のピカリはあんた？

僕はプロのカメラマンなんだ。君たちと同じで、幽霊を追いかけてる。

私たちは幽霊なんか追いかけてません。なるべくなら、一生会わずに済ませ

いと思ってるんです。

それなら、どうしてこんな時間に学校にいるんだ。

もう帰るところなんです。どいてください。

その前に、一つだけ質問させてくれ。女の子に会わなかったか？

女の子って？

歳はたぶん、二十五、六。白いコートを着て、白いパンプスをはいている。

（カニタニに）昨夜の人じゃないの？

知ってるんだね？

昨夜、あなたに襲われた後、帰ろうと思って、校門まで来たら、突然話しか

けられたのよ。

やっぱり、校門か。

初めて会うのに、やけに馴れ馴れしくてさ。（腕時計を示して）この時計を

くれたのよね。  
あの人は「預かってくれ」って言ったのよ。  
私はコインロッカーじゃないのよ。一日取りに来なかつたら、もう私の物よ。  
その時計、ちよつと見せてくれないか？（カニタニの手をつかむ）  
（モモヤマの頬を叩いて）触らないで！  
この人、やっぱり、変質者よ！  
違うよ違うよ。僕はだね——

カニタニ・サルサワ・ウスイケ・モモヤマが去る。ナナコがやってくる。後を追って、アヅチがやってくる。

アヅチ 動くな！ 動くと、脱ぐぞ！  
ナナコ 脱ぐ？ 今、「脱ぐ」って言ったの？  
アヅチ 俺はけつして変質者じゃない。しかし、真実を捕まえるためなら、何でもする。俺に脱いでほしくなかつたら、質問に答える。  
ナナコ わかった。何でも答える。  
アヅチ 質問その一、あなたは幽霊ですか？  
ナナコ はい。  
アヅチ え？ おおおまえ、やややっぱり、ゆゆ幽霊なのか？  
ナナコ イヤだ、本気にしたの？  
アヅチ 何だ、嘘か。  
ナナコ 嘘じゃないわよ。本物の幽霊よ。  
アヅチ そそそうなのか？

ナナコ  
アヅチ

バカね。すぐに信じるんだから。  
一体どっちが真実なんだ。正直に答えないと、脱ぐぞ！

そこへ、ムロマチがやってくる。

ムロマチ

アヅチ君、はしたない真似はやめなさい。

ナナコ

あなた、もしかして。

ムロマチ

こいつは私のアシスタントなんだ。無礼な真似をして、済まなかった。

ナナコ

(顔を背けて)私、これから行く所があるんです。失礼します。

ムロマチ

その前に、少し話を聞かせれぬか。

ナナコ

(顔を背けて)インタビューなら、マネージャーを通してくれぬか？

ムロマチ

幽霊のくせに、態度がでかいな。死んでも死に切れなかった人間が、生きて

る人間に偉そうな口をきくな。

ナナコ

(顔を背けて)私はちゃんと死にました。天国にも行ってきました。

ムロマチ

それなら、どうしてここにいます。

ナナコ

(顔を背けて)戻ってきたのよ、用事があった。私はどうしてもよかったんだ

ムロマチ

けど、ムロマチ君が、あっ！(口を押さえる)

ナナコ

今、何て言った。ムロマチって言ったのか？

ナナコ

(顔を背けて)それじゃ、続きはまた明日。

ナナコが走り出す。行く手に、モモヤマが立ち塞がる。

モモヤマ

ほら、やっぱり幽霊は存在するでしょう？

ムロマチ  
モモヤマ  
ムロマチ  
ナナコ  
ムロマチ  
（ナナコに）おまえ、私を知ってるな？  
え？先生の知り合いだったんですか？  
（ナナコに）私もおまえを知ってる。前にどこかで会ったことがある。  
あら、私は初めてよ。  
確かに会った。十年か二十年前に。

そこへ、ウラシマがやってくる。

ウラシマ 十五年前だよ。僕と一緒に死んだんだ。

ナナコ バカ！ そうやって、突然現れたら、驚くでしょう？

ウラシマ そうか。（咳払いをして、ムロマチに）やあ、久しぶり。

ナナコ ダメよ。やっぱり、驚いてる。

ウラシマ （ムロマチに）驚かないで。僕は別に何の恨みも持ってません。どうしても

話したいことがあって、戻ってきたんです。

ムロマチ 行くぞ、アツチ、モモヤマ。

ウラシマ アカネ！ 一分だけでいいんだ。僕の話聞いてくれないか。

ムロマチ あんたのことは忘れたんだ。

ナナコ ほら、やっぱり、聞く耳を持たないじゃない。

ナナコが走り去る。

ウラシマ 待てよ、ナナコ！（ムロマチに）必ずもう一度、会いに来るから。

ウラシマが走り去る。

モモヤマ 先生の知り合いだったんですね？

ムロマチ 亭主だよ。

アヅチ 亭主っていうと、旦那様？

ムロマチ 一緒にになって、一年もしないうちに死んじゃった。十五年前の冬の夜。

ムロマチ・アヅチ・モモヤマが去る。



クサナギがやってくる。椅子に座って、手紙を読む。

クサナギ

「図書室の整理はなかなか終わりませんでした。古い本を何百冊も運ばされて、腰は痛むし、手は疲れるし。時計が六時を回ったところで、ようやくミドリ先生が言いました。『続きは明日にしましょう。明日も手伝ってくださいわよね?』。私はニッコリ笑って、図書室を出て、小さな声で呟きました。手伝うわけねえだろう、バーカ」

アゲハがやってくる。反対側から、アゲハの母がやってくる。

アゲハ

ただいま。

アゲハの母

お帰りなさい、アゲハちゃん。お部屋に行く前に、こっちに来なさい。

アゲハの母

お説教なら、後にして。私、おながが空いちやった。

アゲハ

ハイハイ。でも、これだけは先に言わせて。アオタ先生がなんて言ったか知らないけど、私は何もしてないの。

アゲハの母

何もしてなかったら、先生がお電話をくださるわけないでしょう?

アゲハの母

あいつとはなんですか、先生に向かつて。

アゲハの母 だって、私のこと、転落しかかっているって言うんだもん。

アゲハの母 あなたのことを心配してくださっているんでしょう？

アゲハの母 余計なお世話なのよ。

アゲハの母 余計なお世話とはなんですか。アゲハちゃん、学校でサングラスをかけてるんだって？

アゲハの母 あれは、太陽が眩しすぎるから。

アゲハの母 出しなさい。

アゲハの母 出したら、返してくれないでしょう？

アゲハの母 勉強には必要ないものでしょう？ いいから、出しなさい。出しなさいって

アゲハの母

ば！

ヤンマがやってくる。反対側から、ヤンマの母がやってくる。

ヤンマの母 ただいま。

ヤンマの母 あ、お帰り、ミュキ。ちよつとこつちへ来てごらん。

ヤンマの母 何よ。

ヤンマの母 いいからいいから。そこに座って、母ちゃんの目を見てごらん。

ヤンマの母 いらめつこでもしようって言うの？

ヤンマの母 お、軽やかわしたね。かわすってことは、何か疚しいことがあるね。

ヤンマの母 別に何も疚しいことなんかはないよ。

ヤンマの母 だったら、母ちゃんの目を見てごらん。

ヤンマの母 見たよ。

ヤンマの母 瞬きが多いね。

ヤンマの母 母ちゃんだったって、瞬きするでしょう？

ヤンマの母 やけに突っかかるね。やっぱり、疚しいことがあるね。

ヤンマの母 何もないよ。プールの水は抜いたけど、別に疚しいとは思ってないもん。

ヤンマの母 プールの水を抜くのはいいことかい、悪いことかい。

ヤンマの母 悪いことだよ。他人様にも迷惑がかかるし、水だってもったいないよね？ どう考えたって、

ヤンマの母 悪いことだよ。悪いことをしておいて、どうして疚しくないんだい。

ヤンマの母 だって、ちゃんと罰を受けたし。

ヤンマの母 罰さえ受ければ、何をやってもいいって言うのかい？

カブトがやってくる。

カブト ただいま。

クサナギ お帰り。

カブト やっぱり、誰もいない。

カブトが腰を下ろして、テレビを点ける。

アゲハの母 (アゲハに) どうしても出さないんなら、ママもあなたに夕食を出しませんからね。

アゲハの母 そんなの、ずるい。図書室の整理で、おなかがぺこぺこなのよ。

ヤンマの母 (ヤンマに) 悪いことをしたら、反省しなくやダメだよ。反省しない子には、夕御飯を食べさせないからね。

ヤンマ  
アゲハの母  
アゲハの母  
ヤンマの母  
アゲハの母  
アゲハの母  
ヤンマの母  
アゲハの母  
ヤンマの母  
アゲハの母  
ヤンマの母  
アゲハの母  
ヤンマの母

反省はしてるよ。  
（アゲハの母に）反省してるから、夕御飯を食べさせてよ。  
だったら、サングラスを出しなさい。  
（ヤンマに）サングラスまで、勝手に持ち出したりして。父ちゃん、怒ってたよ。  
取ったんじゃないよ。借りたんだよ。（サングラスを差し出す）  
（アゲハの母に）私のお金で買ったんだからね。学校には持っていけないから、後で返してよね。（サングラスを差し出す）  
（受け取って）こういうものをかけたがるのは、心が乱れてる証拠よ。  
（受け取って、ヤンマに）こういうものは似合う人がかけなくちゃ。父ちゃんにもあんまり似合わないから、母ちゃんが使うからね。  
鏡を見てよ。  
（アゲハの母に）ほら、見てよ。私のどこが乱れてるって言うの？  
（ヤンマに）やっぱり、似合ってるじゃないか。  
（アゲハに）ママの目はごまかせません。あなた、最近、帰りが遅いでしょ。どこに行ってるの？  
（ヤンマに）夜中に外を出歩くのも、感心しないね。子供は九時に寝るって、昔から決まってるんだ。  
（アゲハに）お友達の家だなんて、嘘でしょう？ デイスコとか、いかがわしい場所に行ってるんじゃないの？  
行っけないよ。本当は、お寺巡りをしてるの。幽霊に会うために。  
幽霊に？ ウツ！（気を失って倒れる）  
ハッ！（アゲハの母の体を支える）

ヤンマの母 何してるの、母ちゃん？

ヤンマの母 今日から、社交ダンスの教室に通い始めてね。その復習だよ。

アゲハの母 (体を起こして、アゲハに) あなた、幽霊が怖くないの？

アゲハ 怖くないよ。

ヤンマ (ヤンマの母に) 私は幽霊より、水の方が怖い。

ヤンマの母 そんなの、最初のうちだけだよ。慣れれば、好きになるさ。

アゲハの母 (アゲハに) 明日から、お寺巡りは禁止よ。それから、水泳の補習に行くのも禁止。

ヤンマの母 (ヤンマに) 泳げるようになったら、父ちゃんと三人で海に行こう。海で泳

ぐと、気持ちいいよ。

アゲハの母 (アゲハに) あなたは泳げるんだから、補習に行く必要はないでしょう？

ヤンマの母 (ヤンマに) 海には他にも楽しいことがある。ボーイフレンドが作れるんだ。

ヤンマの母 母ちゃんだって、海で父ちゃんを捕まえたんだよ。このナイスバディで。

アゲハ (アゲハの母に) 私は、ヤンマに泳げるようになってほしいの。だから、一緒

に付き合ってるんじゃない。

アゲハの母 ヤマダさんはヤマダさん。あなたはあなたでしょう？

ヤンマの母 (ヤンマに) そりゃ、おまえにはおまえの考えがあるだろうけどさ。「泳ぐ

のはイヤだ。だから、プールの水を抜く」っていうのは、間違いだろう？

ヤンマ でも――

ヤンマの母 アゲハの母 話はこれでおしまい。自分の部屋へ行きなさい。

ヤンマの母 アゲハの母 話はおしまい。自分の部屋へ行きなさい。

アゲハの母 ダイエットしたかったんじゃないの？

ヤンマの母（ヤンマに）今夜は寿司でも取ろうかね。

アゲハの母・ヤンマの母が去る。後を追って、ヤンマも去る。

クサナギ  
アゲハ

「こうして、私のダイエットは着々と進んでいます」  
三枚のはずが、大分オーバーしてしまいました。国語の先生には、大河ドラマのように読みごたえがあったと伝えておいてください。

クサナギ

また途中でおしまいかな？

アゲハ

途中じゃないでしょう？ ちゃんと一日の出来事、全部書いたじゃない。

クサナギ

ウラシマとナナコはどうなったんだ。

アゲハ

今の時点では、私にもわかりません。

クサナギ

次はカブトの番だな。あいつにも、手紙を書くように言ってくれよ。

アゲハ

カブトは、国語が大の苦手だったでしょう？

クサナギ

そうだった。あいつの字は、男の僕より汚いんだ。

アゲハ

一応言っておくけど、あんまり期待しないでください。

クサナギ

それなら、アゲハが書いてくれよ。この勢いで、明日もサラサラッと。

アゲハ

これで、国語の宿題はおしまい。次は数学の問題集だ。

クサナギ

手紙ぐらい、一時間もあれば書けるだろう？

アゲハ

来年、こういう宿題が出たら、書きますから。

クサナギ

一年も待てないよ。

アゲハ

八月十五日、オオシマアゲハ。

クサナギ

そう言えば、ナナコが読んでた、死後の世界の本。あの本はどうした？

アゲハ

追伸、ナナコの本は、私も気になってたんです。明日、学校に行つて、読ん

クサナギ  
アゲハ  
クサナギ

でみようつと。  
題名はなんていうんだ。  
『ナツヤスミ語辞典』  
よし、明日、ブック・オフで探してみよう。

アゲハが去る。ムロマチがやってくる。

ムロマチ  
カブト  
ムロマチ  
カブト  
ムロマチ  
カブト  
ムロマチ  
カブト  
ムロマチ  
カブト  
ムロマチ  
カブト  
ムロマチ  
カブト  
ムロマチ  
カブト  
ムロマチ

ただいま。  
お帰り。また仕事？  
まあね。  
今日の夕飯は、母さんの番だからね。  
わかってるよ。それより、カズコ。あんたの学校、幽霊が出るんだって？  
どうして知ってるの？  
近所で評判になってるのよ。  
私、会ったよ。  
いつ。  
昨日も今日も。男の幽霊と女の幽霊。  
話しました？  
少しね。  
そう。  
男の人はプロのカメラマンなんだって。今から十五年前に死んだみたい。その人が写真を撮ると、十五年前の景色しか写らないだ。  
カメラを持ってたの、その幽霊。

カブト  
ムロマチ  
カブト  
ムロマチ  
カブト  
ムロマチ  
カブト  
ムロマチ  
カブト  
ムロマチ  
カブト  
ムロマチ  
カブト  
ムロマチ  
カブト  
ムロマチ  
カブト  
ムロマチ

そうじゃなくて。

私のカメラを持ち出して、幽霊に貸したな？

ごめん。

私のカメラを使うのはいいけど、他の人に貸すのはやめてよね。

もう貸さない。約束する。

それからさ、あんた、幽霊は怖くないみたいだけど、あんまり仲良くならな

い方がいいんじゃない？

仲良くなんか、なつてないよ。

それなら、いいけど。

このカメラ、私に出来ない？

いいよ。

本当？ これ、一番古いカメラで、一番大切にしてたんじゃないの？

別に。最近、あんまり使つてないし。

私、アルバムを作ろうと思うんだ。自分のアルバム。

私がアルバム嫌いなもの、知ってるでしょう？

いいじゃない。私のなんだから。母さんは撮らないし。

ねえ、カズコ、写真というのはね——

過去を懐かしむために撮るんじゃない。真実を捕まえるために撮るんだ。

わかっているなら、どうして。

真実って、大切なものでしょう？ 私は私の真実を大切にしたいの。

真実っていうのは、そんなに簡単に捕まらないのよ。あんたの腕じゃ、まだ

まだね。



カブト・ムロマチが去る。

郵便屋が自転車に乗って、やってくる。

郵便屋

クサナギさん、郵便です。

郵便屋

やっぱり、来てくれると思つてたんだ。今日の手紙はカブトからだろう？

郵便屋

いいえ。

郵便屋

それじゃ、アゲハから？ まあ、話の続きさえわかれば、どっちでもいいや。

郵便屋

今日は、手紙はありません。

郵便屋

ないの？ それなら、どうしてここに來たの？

郵便屋

約束したでしょう？ 昨日書いてた手紙を取りに來るつて。

郵便屋

あれは、まだ書き終わつてない。

郵便屋

丸一日あつたのに？

郵便屋

そのかわり、今度はアゲハに書いた。(ハガキを出し)「前略、続きを読み

郵便屋

たし。至急送れ。クサナギ」

郵便屋

電報みたいな手紙ですね。どうせなら、電報にした方がいいんじゃないですか？

クサナギ 出す）  
あつ！ 貴様、騙したな？

郵便屋が逃げる。クサナギが後を追う。

郵便屋 ひいきされた生徒さんにかわって、天誅を下したんですよ。

クサナギ こら、待て！ 待たないと、郵政大臣に言いつけるぞ！

郵便屋 あつ！

クサナギ 何だよ。

郵便屋 あなた、松葉杖は？

クサナギ あつ！ 治ってたのか。

郵便屋 ごまかしてもダメです。あなた、僕を三日間も騙してましたね？

クサナギ そんなの、お互い様だろう？

郵便屋 先に騙したのは、あなたの方ですよ。どうして治ってないフリをしたんです。

クサナギ だって、怪我もしてないのに、家でブラブラしてたら、失業者みたいじゃないか。

郵便屋 それじゃ、あなた、最初から怪我なんかしてなかったんですか？

クサナギ 怪我はしたよ。刑事ドラマの犯人役で、東京駅のロケ。あの仕事がよく行

ってれば、小さな役だけど、レギュラーがもらえるはずだったんだ。それな

のに、怪我のおかげで、すべてがパー。それ以来、誰からも呼びがかから

ない。僕みたいなオッコッコイは、信用できないんだってさ。

郵便屋 それで、採用通知を待ち焦がれてたんですか。

クサナギ これが最後に残された、たった一つの仕事なんだ。これがダメなら、僕の人

郵便屋

クサナギ

郵便屋

クサナギ

郵便屋

クサナギ

郵便屋

クサナギ

クサナギが手紙を開く。別の場所に、カブトが現れる。

カブト

クサナギ

カブト

クサナギ

カブト

クサナギ

カブト

クサナギ

生はおしまいなんだ。

しかし、これは採用通知じゃないようですね。(封筒を差し出す)

(受け取って)ムロマチカズコ? やっぱり、カブトか。

あなたは生徒さんに人気があるんですね。しかも、女の生徒さんに。

こいつらに好かれても、あんまりうれしくないけどね。

あなたみたいないい加減な人がどうして。

そうなんだよな。僕なんか、ちっともいい先生じゃなかったし、いい先生になろうって気もなかったのに。

それなら、どうして先生になったんですか?

夏休みがあるからさ。

どうして夏休みには終わりがあるんだろう。このまま夏休みが終わらなければ、どんなに素敵だろう。八月三十一日が来るたびに、私は悔しくてたまりません。

日本には四季がある。夏の陽差しも気持ちいいけど、秋の風だって捨てたもんじゃないよ。

私には、季節は二つしかありません。夏と、夏を待つ間。

待ってることが大切なんだな。夏休みが終わらなかつたら、夏休みのすばらしさを忘れてしまう。

そうかな。

桜の花は散るからこそ美しい。

カブト

散らない桜がないから、そう思うんだ。一年中咲いてたら、一年中お花見ができるんだよ。

クサナギ

いいねえ。一年中、酒が飲める。

カブト

夏休みだつて、同じさ。実際に終わらない夏休みを過ごしてみなくちゃ、いか悪いか、わからない。

クサナギ

僕にはわかる。終わらないっていうのは、恐ろしいものなんだ。時間の流れは冷たい。人間なんかお構いなしに流れていく。時々、自分で止まらなくちゃ、

カブト

夏休みが嫌いなんだな？

クサナギ

そんなこと言っていないだろう？

カブト

好きなら、終わってほしくないはずだ。

カブト

今は好きでも、いつかは嫌いになるかもしれない。好きなままにいたかったら、嫌いになる前に、自分の手で終わらせるしかないんだ。

クサナギ

自分の手で？

郵便屋

それはけつして、恥ずかしいことじゃない。

郵便屋

クサナギさん、郵便です。

郵便屋

あれ？ もう一通あったの？

郵便屋

あなたはずっと待ってた手紙です。（封筒を差し出す）

郵便屋

でも、その封筒は、学校のものですね。

郵便屋

（手紙を開いて）合格だ！ 九月一日から、学校に来いってさ。

郵便屋

また先生になるんですか。

クサナギ

三年前と同じ、産休代用教師だけどね。新しいカブトたちが、僕のことを待

郵便屋  
クサナギ  
郵便屋

ってるんだ。  
渡そうか渡すまいか、ずっと迷ってたんですが。  
それじゃ、やっぱり、この手紙は。一週間前に着いてたんだな？  
あなたの夏休みも、これで終わりですね。

郵便屋が自転車に乗って、去る。

カブト

暑中お見舞い申し上げます。最初に言っておきますが、私はクサナギ先生が嫌いです。小学校から今まで、いろんな先生に習ってきたけど、クサナギ先生くらい不真面目な先生はいませんでした。アゲハは「先生らしくなくていい」って言ってたけど、先生っていうのは勉強を教えるのが仕事でしょう？ 私には、クサナギ先生に何かを教わったって記憶が全くありません。

クサナギ  
カブト

僕にも、何かを教えたって記憶は全くない。ごめん。  
でも、一つだけ忘れられないことがあります。図画工作の授業で、校庭の景色を描いた時、私は桜の木を緑色に塗った。その時、季節は冬で、枝には葉が一つもなかったのに。ヤンマもアゲハも笑ったけど、先生だけは笑わなかった。「僕はカブトの絵が好きだ。カブトには、僕らに見えないものが見え

クサナギ  
カブト

たんだ」って。  
ごめん、その記憶も全くない。  
だから、この手紙を先生に送ろうと思ったんです。同封した写真を見てくだ

クサナギ  
カブト

さい。  
誰だい、この人？  
先生なら、その写真の意味がわかるんじゃないかと思って。

クサナギ

カブト

クサナギ

カブト

写真のことなら、お母さんに聞けばいいだろう。  
私が知りたいのは、その人が誰かということ。  
わかった。こいつも役者なんだな？ でも、売れない役者は星の数ほどいる  
からね。

役者じゃありません。その人とは一昨日初めて会ったのに、初めてって気が  
しなかった。何だかとても懐かしかったです。その人と会ったのは、う  
ちの学校のプールでした。そして、その人と別れたのは――

ヤンマが飛び出す。後を追って、アオタ先生・カニタニ・サルサワ・ウスイケが飛び出す。

アオタ先生

カニタニ

サルサワ

カブト

カニタニ

ヤンマ

アオタ先生

ウスイケ

カブト

カニタニ

アオタ先生

ヤマダ、先生は怒ったぞ。今日という今日は怒ったぞ。

ヤマダさん、あなたがプールの水を抜くのは、補習を中止にするためじゃな  
くて、先生を殺すためだったのね？

（ヤンマに）今日なんか、空中回転をして、飛び込んだのよ。生きてる方が  
不思議なくらいよ。

死ぬ前に、ミイラ男になりそうだな。  
ヤマダさん、あなた、いつ学校に来たの？

今朝四時に起きて。「早起きは三文の得」って言うでしよう？

早起きを悪用するヤツがあるか！  
（ヤンマに）気が付かなかった。朝来れば、幽霊に会わずに済むんだ。

そんなことないよ。この学校の幽霊は、夜も昼もお構いなしに出るんだから。  
そうなのか？  
先生なんか、昨日、二人も見ただ。話までしちゃったんだ。

サルサワ  
アオタ先生

幽霊は苦手じゃなかったんですか？  
それが実際に会ってみると、ちつとも怖くないんだな。カニタニ、おまえなら勝てるぞ。

カニタニ

得意の張り手をぶちかましてやるか。

サルサワ

バチンと叩こうと思つて、手が顔を通り抜けたら？

カニタニ

先生、私、おなかが痛い。早退します。

ヤンマ

諦めた方がいいんじゃない？ この学校は、幽霊が集まる駅なんだつて。私たちに何かしようつていうんじゃないんだから、仲良くするしかないのよ。

カニタニ

どうして幽霊と仲良くしなくちゃいけないのよ。

ウスイケ

(ヤンマに)「友達を選びなさい」つて、ママに言われた。

ヤンマ

それは、私からも言いたい。友達を選びなさい。

カニタニ

あんたに言われる筋合いないわよ。私だつて、ムロマチさんに同じことを言

アオタ先生

いたいの、グツとこらえてるのよ。

ヤンマ

おまえたち、友情を壊し合うんじゃない。

カニタニ

それで、今日の罰は何ですか？

サルサワ

決まってるじゃない。トイレ掃除よ。

カニタニ

今日はオオシマさんがいないから、時間がかかるわね。

カニタニ

オオシマさんには冬休みにやってもらおうからいいわ。

アオタ先生

カニタニ、冬休みの計画まで立てるな。(ヤンマに) トイレ掃除はまた後で

カニタニ

いい。ここでしばらく待ってるんだ。

サルサワ

さては、もっと重い罰ですか？

ウスイケ

先生方を集めて、臨時の職員会議？

ウスイケ

始末書？ 停学？ まさか、退学？



カブト

義務教育に退学があるか？

カニタニ

(アオタ先生に)それなら、せめて停学ですよ？ でも、夏休みに停学なんて、意味がない。

アオタ先生

お母さんに来てもらうんだ。俺が言ってもダメ、お母さんが言ってもダメなら、PTAでスクラムを組むしかない。

カニタニ

なるほどね。  
(アオタ先生に)うちの母親は呼ばないですよ？

アオタ先生

ムロマチ、おまえのお母さんは重要な戦力になるんだ。

ウスイケ

ミドリ先生はどうでしょう？  
そうだな。おまえたちの担任なんだから、一応呼んだ方がいいだろうな。

アオタ先生が去る。

ウスイケ

いつもと違う。

サルサワ

昨日の帰り、ミドリ先生に言われたらしいわ。「迷惑です」って。

カニタニ

ヤマダさん、アオタ先生は今、手負いの虎よ。いつもより凶暴になってるから、気を付けた方がいいわね。

カニタニ・サルサワ・ウスイケが去る。

クサナギ

「アオタ先生なんて、別に怖くありません。教師が生徒に暴力を振るっただろうなるか。いくら体力バカでも、知らないわけがない。それより、問題はそのうちの母さんです。写真の世界は、男の社会。若い頃は、先輩のカメラマンに、何度も叩かれたそうです。だから、母さんもすぐに手が出る。しかも、平手じゃなくて、ゲンコツです。あれで女とは思えません。今日こそはゲンコツだ。そう思って、落ち込んでいると」

ナナコがやってくる。

ナナコ

ハイ、元気？ 私は死んでるけど、元気。

カブト

やめろ。こっちに來るな。

ナナコ

まあまあ、そう言わないで。ちよつと聞きたいことがあるんだけどさ。あなたたち、カニタニって子、知らない？

カブト

知ってるよ。ついさっきまで、ここにいた。

ナナコ

今、どこにいる？

カブト

さあね。今日の補習は中止になったから、家に帰ったんじゃないか？

ヤンマ

(ナナコ) カニタニさんに何の用？ まさか、とりつこうって言うの？

ナナコ

私がそんなことをする人間に見える？



カ ブ ト  
ナ ナ コ  
カ ブ ト  
ヤ シ マ  
カ ブ ト  
ナ ナ コ  
カ ブ ト  
カ ブ ト  
ナ ナ コ  
カ ブ ト  
カ ブ ト  
ヤ シ マ  
ナ ナ コ  
カ ブ ト  
カ ブ ト  
カ ブ ト  
カ ブ ト  
カ ブ ト  
カ ブ ト  
カ ブ ト  
ナ ナ コ  
カ ブ ト  
カ ブ ト  
カ ブ ト  
カ ブ ト  
カ ブ ト  
ナ ナ コ  
カ ブ ト  
カ ブ ト

私が生まれる前にね。私が母さんのおなかにいる時、交通事故で死んだんだ。再婚はしてないの？

そういうつもりは全然ないみたい。写真だけが生き甲斐って感じ。

カブトのお父さんのことが忘れられないんじゃない？

それはないよ。父さんの話は絶対にしないし。だから、私は顔も知らない。

アルバムがあるでしょう？

母さん、アルバムが嫌いなんだ。「写真はアルバムに貼るために撮るんじゃない」って言うって。

知りたいとは思わないの？

小学四年の時だったかな。親戚の叔父さんに聞いたんだ。「私の父さんはどんな人だったの？」って。最初は渋ってたけど、しつこく聞いたら、やっと教えてくれた。父さんは、よその女の人と一緒に死んだんだ。

それはつまり、浮気してたってこと？

そうとしか考えられないだろう？ 母さんは父さんが許せないんだ。だから、何も言わないんだ。

でも、せめて顔ぐらいは知りたいたいでしょう？

今は別に。母さんは私に教えたくないんだ。だったら、私も知りたくない。でも―――

私の話はどういうだろうか？ さっさとカニタニの家に行けよ。

そう言われても、住所も電話番号も知らないし。

あなた、カニタニさんの知り合いじゃないの？

一昨日の夜、ここで会ったのよ。こんな遅い時間にいるんだから、私と同じ幽霊だろうと思っただけ。

ヤンマ 違う違う。あの人、私がプールの水を抜くところを撮りに来たのよ。  
ナナコ だから、カメラを持ってたんだ。  
ヤンマ そうか。あなたはカニタニさんに写真を撮られたのね？ その写真がほしく  
て、カニタニさんを探してるんでしよう？  
カブト バカだな。あんたは幽霊なんだから、写真には写らないよ。会いに行っても  
無駄さ。

ヤンマ (ナナコに) 諦めて、天国に戻ったら？ ほらほら。  
ナナコ ちよっと待って。  
ヤンマ 何よ。

ナナコ 彼が撮った写真には、十五年前の景色が写ってた。ということ、私が写真  
を撮っても、やっぱり十五年前の景色が写ることよね？  
カブト たぶんね。でも、それがどうかした？

ナナコ このカメラ、貸して。(カブトの手からカメラを取る)  
カブト ダメダメ。人には貸さないって約束したんだ。

ナナコ いいじゃない、貸してよ。  
カブト 返せよ。こら、ナナコ！

ナナコが走り去る。後を追って、カブトが走り去る。

クサナギ こら、カブト！ 先生が「待ってる」って言ったのを、忘れたのか？

ヤンマ 私も帰っちゃおうかな。

クサナギ ダメダメ。悪いことをしたら、男らしく罰を受けなくちゃ。

ヤンマ 私は女の子です。

クサナギ  
ヤンマ

それに、逃げたって思われるのはイヤだろう？  
そうだ。私は逃げないって決めたんだ。逃げないぞ。逃げてたまるか。

そこへ、ミドリ先生・アオタ先生・ヤンマの母・アゲハの母・アヅチ・モモヤマがやってくる。

ヤンマの母  
ミドリ先生  
ヤンマの母

ミユキ！ おまえ、またやったんだって？  
まあまあ、ヤマダさんのお母さん、怒らないで。  
これが怒らずにいられますか。あれほど、他人様に迷惑をかけるんじゃない  
って言ったのに。(ヤンマに) こっちにおいで。

ヤンマ

イヤだ。

ヤンマの母

いいから、こっちにおいで。

ヤンマ

イヤだ。母ちゃん、ぶつもん。

ヤンマの母

ぶたれるようなことをしたのは誰だい！

アオタ先生

まあまあ、ヤマダさんのお母さん、暴力はいけません。

ヤンマの母

痛い思いをしなくちゃ、わからないんですよ。甘やかしたら、つけあがるんだから。大体、先生方が甘やかすから、三回も同じ悪さを繰り返すんですよ。

アオタ先生

私がいっ甘やかしました？

ミドリ先生

まあまあ、アオタ先生。

ヤンマの母

一回目の時にガツンとやってくれれば、こいつだって反省したんですよ。

ミドリ先生

体罰はいけませんわ。中学生にもなったら、話してわからせなくちゃ。

ヤンマの母

話してわからないんだから、叩くしかないでしょう？ 全く、先生なんて、

口だけ達者で、全然頼りにならないんだから。

アオタ先生  
ミドリ先生  
ヤンマの母  
ミドリ先生  
アオタ先生  
アゲハの母  
アオタ先生  
ヤンマ  
アゲハの母  
ヤンマ  
アゲハの母  
アヅチ  
ミドリ先生  
モモヤマ  
ミドリ先生  
アヅチ  
モモヤマ  
アヅチ  
モモヤマ

口だけとはなんですか。私は筋肉だって――  
まあまあ、アオタ先生。(アオタ先生の腕をつかむ)  
昼間っからイチャイチャして。子供より、恋人の方が大事ってことですか。  
恋人なんかじゃありません！

まあまあ、ミドリ先生。  
やっぱり、アゲハは来てないんですか？

ヤマダ、今日はオオシマに会ったか？  
会ってない。

私に黙って、家を出ていったのよ。どこに行ったか、知らない？  
知らない。

でも、アゲハは昨日も一昨日も、あなたに付き合って、学校に来たんでしょ？  
まさか、途中で誘拐されたんじゃないや。ウツ！(氣を失って倒れる)

奥さん！(アゲハの母の体を支える)  
(アヅチ・モモヤマに)あら、あなたは？

僕らはムロマチの母親の代理です。  
「お母さんに来てほしい」って言ったはずですけど。

それはちゃんと伝えたんですが、「学校には行きたくない」って。  
(モモヤマを叩いて、ミドリ先生に)「行きたいけど、行けない」って。ど

うしても今日中にやらなくちゃいけない仕事がありました。

仕事なんかしてなかったじゃないか。  
(モモヤマを叩いて、ミドリ先生に)くれぐれもお詫び申し上げるようと

言づかりました。  
おまえ、嘘がうまいなあ。

アヅチ  
アオタ先生  
ヤンマ  
ミドリ先生  
ヤンマ  
モモヤマ  
アゲハの母  
ヤンマの母  
アゲハの母  
ヤンマの母  
アゲハの母  
アオタ先生  
ヤンマ  
ヤンマの母  
ミドリ先生  
ヤンマの母  
ミドリ先生  
ヤンマ  
アオタ先生  
ヤンマ  
ミドリ先生

(モモヤマを叩いて、ミドリ先生に) それで、カズコ君は？  
ヤマダ、ムロマチはどうした？  
行っちゃった。  
行っちゃったって、どこへ？  
ナナコがカメラを持って逃げたから、それを追いかけて――  
ナナコって、幽霊の？  
幽霊？ この学校には幽霊は出るんですか？  
奥さん、知らなかったんですか？ この近所じゃ、有名ですよ。  
まさか、アゲハも一緒にやないでしょうね？ アゲハが幽霊に誘拐されたんだとしたら、私はどこに訴えればいいんですか？  
妖怪ポストに手紙を出すんですよ。そうすれば、鬼太郎が――  
奥さん、こういう時に冗談はやめてください。  
ヤマダ、おまえはどうして一緒に行かなかったんだ。  
私は悪いことをしたんだから、罰を受けます。  
居直るんじゃないよ、子供のくせに。  
ヤマダさん、先生は罰を受けさせるために、お母さんをお呼びしたんじゃないのよ。あなたに反省してほしいから。  
無駄無駄。口で言っても、無駄よ。  
反省しなかったら、明日も水を抜くでしょう？  
泳ぎたくないのよ。私は絶対に泳ぎたくないの。  
中学生にもなつて、泳げなくてどうする。  
私は死ぬまで泳げなくていいの。  
逃げちゃダメよ、ヤマダさん。



ヤンマの母  
ヤンマの母  
ヤンマの母  
ヤンマの母  
ヤンマの母  
ヤンマの母

ミドリ先生  
アオタ先生  
ヤンマの母  
アゲハの母  
アツチ  
モモヤマ  
ミドリ先生  
ヤンマ

私は逃げなかつた。  
何言つてんだい、水を抜いておいて。

抜いたけど、逃げなかつた。

水からは逃げ回つてゐるじゃないか。

母ちゃんにはわからないのよ、水の怖さが。

わかりませんね。

私の気持ちがわからないのよ。

図々しいこと、言うんじゃないよ。

何が図々しいのよ。私は「泳ぎたくない」って言つてゐるだけなのよ。どうして認めてくれないの？ 大人になれば、「泳ぎたくない」って言えば、泳が

なくて済むでしょう？ どうして大人はよくて、中学生はダメなのよ。

ヤマダさん、私も昔は水泳が苦手だったのよ。確かに今は泳がないけど、中学生の時は、我慢して泳いだわ。

(ヤンマに) 先生も我慢して、掃除したぞ。

(ヤンマに) 私も我慢して、宿題をやったよ。

(ヤンマに) 私も我慢して、給食を食べた。

(ヤンマに) 俺も我慢して、朝練に行った。

(ヤンマに) 僕も我慢して、委員をやった。

(ヤンマに) みんな、我慢してきたのよ。どうしてあなただけ、我慢できないの。

たたくさん我慢してゐるじゃない。授業だって、制服だって、校則だって。どんなにバカらしいと思つても、どんなに苦しいと思つても、私は絶対に逃げなかつた。でも、泳ぐのだけは我慢できないのよ。一つくらい我慢できなくても、

仕方ないでしょう？ どうしてわかってくれないの？

クサナギが立ち上がる。

クサナギ ヤンマ、玉手箱を開けるんだ。

ヤンマ 玉手箱？

クサナギ よく頑張った。先生やお母さんを相手に、一人でよく戦った。でも、もうおしまいだ。

ヤンマ イヤだ。私は最後まで戦う。

クサナギ もうダメだ。セコンドの僕がタオルを投げる。これ以上戦ったら、君は二度と立ち上がれなくなる。

ヤンマ 立ち上がれなくても、戦う。最後まで戦う。

クサナギ 今がもう最後なんだ。玉手箱を開けよう。

ヤンマ 玉手箱って、何よ。

クサナギ 夏休みを終わらせるんだ。

ヤンマ イヤだ！

ヤンマが走り去る。後を追って、ミドリ先生・アオタ先生・ヤンマの母・アゲハの母・アヅチ・モモヤマが走り去る。

ナナコがやってくる。後を追って、カブトがやってくる。

カブト

待てよ、ナナコ。どこまで行くんだよ。

ナナコ

私たちが死んだ場所。

カブト

私たちが、ナナコとウラシマさん？

ナナコ

そうよ。私たちは十五年前に、一緒に死んだの。駅前十字路口で。

カブト

もしかして、交通事故？

ナナコ

トラックに撥ね飛ばされて、地面に叩きつけられて。人生まだこれからだったのに。

カブト

でも、事故の現場なんかに行って、何を撮るんだよ。

ナナコ

わからないかな。あの人が撮った写真には、十五年前の景色が写ってた。それはたぶん、あの人の時間が十五年前に止まったからよ。あの人が死んだ瞬間に。

カブト

間によ。そういうことは、私が写真を撮れば、私が死んだ瞬間の景色が写る。

ナナコ

待てよ。そんなことをしたら、あなたの死体が写るじゃないか。

カブト

私じゃなくて、あの人を撮るの。

ナナコ

ウラシマさんだって、死体じゃないか。

カブト

あの人はすぐに死ななかったの。私は即死だったけど、あの人は病院に運ば

ナナコ

れるまで、意識がはつきりしてたんだから。

カブト 瀕死の重傷だったんだろう？ 顔なんか、グチャグチャだったんじゃないか？  
ナナコ それは現像してからのお楽しみ。  
カブト 冗談じゃない。私は、怪談とかホラーとか大嫌いなんだ。どうしてそんな写真を撮らなくちゃいけないんだよ。  
ナナコ クリスマス・プレゼントよ、私からの。  
カブト クリスマス？ 夏なのに？  
ナナコ 私たちが死んだのは、冬だったの。十五年前のクリスマスイブ。

ナナコがカブトにカメラを渡す。そこへ、ウラシマがやってくる。

ウラシマ

悪かったな、急に呼び出して。

ナナコ

あなたって人は、どうしていつもこうなの？

何か困ったことがあるたびに、

ウラシマ

「ナナコ」って。

おまえ以外に頼めるヤツがいからだよ。

ナナコ

結婚して、初めてのクリスマスでしよう？ プレゼントくらい、自分で選びなさいよ。

ウラシマ

苦手なんだよ、そういうの。女が喜びそうなものなんて、わからないし。

ウラシマ

何でもいいのよ。好きな人がくれるものなら、安物だって、趣味が悪くたって、うれしいものなの。

ナナコ

あいつはそういう女じゃない。気に入らないものは、「こんなのいらねえよ」って、はつきり言うんだ。

ウラシマ

そんなことないって。心を込めてプレゼントすれば、きっとわかってくれる。どうせなら、「こいつがほしかったんだよ」って、言わせたいじゃないか。

ナナコ  
ウラシマ  
ナナコ  
ウラシマ  
ナナコ  
ウラシマ  
ナナコ  
ウラシマ  
ナナコ  
ウラシマ  
ナナコ  
ウラシマ  
カブト  
ナナコ  
カブト  
ナナコ  
クサナギ  
ナナコ  
クサナギ  
ナナコ

だから、女の目で選んでほしいんだよ。  
でも、私が選んだってわかったら、奥さん、怒らない？  
どうしてあいつにわかるんだよ。

私が電話するからよ。

人の家庭を壊すんじゃない！

大体、新婚三カ月で、他の女とデートしていいの？

デートなんてしてないじゃないか。

今、私としてるでしょう？

これは断じて、デートじゃない。

デートよ。若い男と若い女が、クリスマスイブに、腕を組んで歩いているのよ。

(ウラシマの腕をつかむ)

腕を組むな！(ナナコの腕を振りほどく)

どう見たって、デートよ。浮気よ。

問題は二人の気持ちだろう？ 学生の頃だって、映画を見たり、授業の帰りに喫茶店に寄ったりしたけど、デートだなんて思わなかったじゃないか。

ナナコはデートだって思ってたんだ。

思っていないわよ。

絶対に思ってた。ねえ、先生？

僕もそう思う。

違うって言うてるでしょう？

ずっと前から好きだったのに、ウラシマさんは気づかなかった。気づいてく

れるのを待ってたのに。

うるさいわね。黙ってなさいよ。

ウラシマ  
ナナコ  
ウラシマ  
ナナコ  
ウラシマ  
ナナコ  
ウラシマ  
ナナコ  
ウラシマ  
ナナコ  
ウラシマ  
ナナコ  
ウラシマ  
ナナコ  
ウラシマ  
ナナコ  
ウラシマ  
ナナコ  
ウラシマ  
ナナコ  
ウラシマ  
ナナコ

そうだ。あいつは時計を持ってないんだ。  
そう言うあなたも持ってないわね。  
僕のはあいつに貸してるんだよ。大学に入った時に買ったやつでさ、安物だし、いい加減、ガタが来てると思うんだ。  
時計なら、自分で選べるでしょう？  
ナナコ。  
わかったわかった。でも、奥さんが気に入るかどうかは、責任持たないからね。私の趣味で選ぶからね。  
え？ こんなの、高すぎるよ。  
こっちもわりかしいいよね。  
こっちも高い。ナナコ、ショーケースじゃなくてさ、こっちの、壁にぶら下がってるヤツにしようよ。  
ケチケチするんじゃないの。結婚して、初めてのプレゼントでしよう？  
結婚式と新婚旅行で、貯金がゼロなんだ。お小遣いだって、あいつ、ちよこっとしかくれないし。  
撮影旅行を一回我慢すれば、買えるって。  
ナナコ。  
すみません。これ、ください。  
バカバカ。本当に買うのか？  
「こいつがほしかったんだよ」って、言わせたいんでしょう？  
（カブトに）そして、家出してやるからな。  
今日は本当に助かったよ。予算はかなりオーバーしたけど。

ナナコ  
ウラシマ  
ナナコ  
ウラシマ  
ナナコ  
ウラシマ  
ナナコ  
ウラシマ  
ナナコ  
ウラシマ  
ナナコ  
ウラシマ  
ナナコ  
ウラシマ  
ナナコ  
ウラシマ  
ナナコ  
ウラシマ  
ナナコ  
ウラシマ  
ナナコ  
ウラシマ  
ナナコ  
ウラシマ  
ナナコ  
ウラシマ

ねえねえ、私にはプレゼントはないの？  
おまえのおかげで、財布は空っぽだ。だから、また今度。  
そう言つて、一度もくれたことないじゃない。  
何度も写真をやっただらう？ 僕が撮った大傑作を。  
鳥の写真なんて、つまらない。  
つまらないとはなんだ。テントを立てて、毛布を被って、何日も徹夜して撮  
った写真ばかりなんだぞ。  
そうだ。この時計、ちょうだい。  
ダメダメ。  
いいじゃない。恩返しだと思つて。  
何だよ、恩返しつて。  
今まで、いろいろ助けてきたでしょう？ ノートを貸したり、授業の代返を  
したり。  
何かしてもらつたびに、食事を奢つたじゃないか。  
じゃ、今日も奢つてくれる？  
ごめん、今日はいつが家で待つてるんだ。そうだ。正月に家に来いよ。何  
でも好きなものを食わせてやるから。  
新婚家庭に行くの？  
あいつはあんまり料理が得意じゃないから、僕が作るよ。冬はやっぱり鍋物  
だよ。そうだ、あいつはおでんが好きなんだ。  
この時計、ちょうだい。  
待てよ。車が来るぞ。  
いいから、ちょうだい。

ウラシマ バカ、危ない！（ナナコの腕をつかむ）

車が激しくスリップする音。車と人が衝突する音。ナナコとウラシマが飛ぶ。そして、倒れる。やがて、ウラシマがゆっくりと立ち上がる。

ナナコ （体を起こして）あの人立ち上がったのは、ちょうどあの辺りだった。カ

カブト カメラを貸して。

ウラシマ 私がナナコにカメラを渡そうとした時――

カブト 待てよ、ナナコ。

ウラシマ ウラシマさんがやってきたのです。

カブト ちよつと待て。ウラシマさんはさっきからいたじゃないか。

カブト いませんでした。

カサナギ 十五年前の話を、ナナコとしてたじやないか。

カブト あれは、ナナコの回想の中のウラシマさん。

カサナギ そして、今度は現実のウラシマさん？ 全然、区別がつかないよ。

カブト 仕方ないよ。私たちには十五年前でも、二人にはたったの十五日しか経って

ナナコ ないんだから。

カブト カブト、カメラを貸して。

ナナコ その前に時計を返してくれ。

ウラシマ カブト。

ナナコ ナナコ、頼む。

ウラシマ イヤだ。

ウラシマ あいつに渡したいんだ。僕らが一緒にいたのは、時計を買うためだったって、



説明したいんだ。

昨日会って、わかったでしょう？

話なんか、聞いてくれないわ。

時計を渡せば、わかってくれる。

言い訳としか思わないわ。

心を込めてプレゼントすれば、わかってくれるんだろう？

何を言ってるのよ。選んだのは私よ。

頼んだのは僕だ。さあ、返してくれよ。

持ってない。

どこへやった。

捨てたのよ、あんなもの。

それなら、それでいい。時計なんかなくなつて、ナナコが一緒に来て、話を

してくれれば。

私が行つたら、余計に怒らせるだけよ。

ナナコのことわかつてくれるよ。

わからないわよ。どうしてだと思ふ？ あんたが何もわかってないからよ。

彼女の気持ちも、私の気持ちも。

ナナコの気持ち？

私だって、プレゼント、一度でいいから、ほしかったのよ。

ナナコが走り去る。

ウラシマ  
カブト

あんな高い時計、二つも買えないよ。  
バカだな。女の子の気持ち全然わかってないんだから。

ウラシマ

気持ちって、何だよ。

カブト

それくらい、自分で考えろ。

ウラシマ

君だって、わからないんじゃないの？

カブト

私はわかるよ。私だって、女の子だもん。

ウラシマ

え？ 君、女の子だったの？

カブト

しらじらしいなあ。あんたの名前、ウラシマじゃないよね？

ウラシマ

どうしてそう思うんだ？

カブト

私の父さんも十五年前に死んだんだ。私が生まれる前に。

ウラシマ

君のお母さんの名前は？

カブト

ムロマチアカネ。

ウラシマ

アカネさんが、こんな男と結婚すると思うかい？

カブト

あの人の趣味、変わってるから。それに、あんたもプロのカメラマンだろう？

ウラシマ

母さんと同じ仕事じゃないか。

ウラシマ

僕はウラシマだよ。ウラシマタロウ。乙姫様を一人残して、地上に帰っちゃ

ったんだ。

ウラシマが歩き出す。カブトが後を追う。が、振り返って、十五年前のウラシマが立ち

上がった場所に、カメラを向ける。フラッシュ。ウラシマがカブトに声をかける。ウラ

シマ・カブトが去る。

ムロマチがやってくる。

ムロマチ

乙姫様は、どうして玉手箱を渡したのだろう。蓋を開けると真っ白い煙が吹き出して、開けた人間を老人にしてしまふ箱。そんな恐ろしい箱を、どうして浦島に渡したのだろう。私が出した答えはこうだ。乙姫様は浦島を愛していた。それなのに、浦島は故郷へ帰ると言い出した。乙姫様を残して。そんな男を許せるはずがない。乙姫様は怒り狂った。そして、浦島への復讐を誓った。棄てるなら、棄てるがいいわ。そのかわり、戻りたくなくても、戻れないようにしてやるからね。玉手箱の中には、乙姫様の悲しみが封じ込められていた。その悲しみが、浦島を老人にしたのだ。老人になれば、二度と海には潜れない。龍宮城にも戻れない。しかし、一つだけ疑問が残る。浦島が蓋を開けずに、玉手箱を捨てたら、どうするつもりだったのか。浦島はもう一度、海に潜るだろう。その時、乙姫様は龍宮城の門を開けるだろうか。別れた時の姿で、あの人が戻ってきたら。

そこへ、アツチ・モモヤマがやってくる。

アツチ

先生、カズコ君の担任の先生が、今すぐ学校に来てほしいと。

ムロマチ  
モモヤマ

ムロマチ

モモヤマ

アヅチ

モモヤマ

ムロマチ

モモヤマ

アヅチ

モモヤマ

アヅチ

モモヤマ

ムロマチ

モモヤマ

アヅチ

モモヤマ  
ムロマチ

おまえらじゃダメだって言われたのか。  
そうじゃなくて、カズコ君がいなくなっただけです。昨日会ったナナコって幽霊と、どこかへ行っちゃってしまっただけなんです。

幽霊とは仲良くなるなって言ったのに。  
先生、ナナコって、ご主人とどういう関係ですか？

バカ。そんなこと、聞くな。  
でも、気になるじゃないか。ご主人は「一緒に死んだ」って言ってたし。

同級生だよ、大学時代の。  
ということは、ただの友達か。でも、ただの友達がどうして一緒に死んだんですか？

そんなこと、聞かなくてもわかるだろう。

おまえにはわかるのか？

恋人だったんだよ。ご主人は先生と結婚してからも、ナナコと付き合ってたんだ。でも、それが先生にバレてしまった。先生は「私を取るの？」 ナナコを取るの？」と迫った。もちろん、ご主人はナナコを取った。二人は逃げた。

先生は包丁を持って、追いかけた。そして――

先生、あなたはなんてむごいことを。  
アヅチ君、冗談はそれくらいにしてくれ。モモヤマ君が本気にする。

え？ 今のは嘘なんですか？  
途中までは本当だ。しかし、まさか浮気の最中に死ぬとはな。迷惑にもほどがある。

カズコ君はそのことを知ってるんですか？  
何も話してない。死んだ時のことも、父親がどんな男だったかも。

アヅチ  
モモヤマ  
アヅチ

聞いたら、シヨックでしょうからね。  
でも、いつかは知りたいたいと思うんじゃないかな。自分の父親なんだから。  
何が父親だ。ご主人は、カズコ君が生まれる前に死んだぞ。先生は、カ  
ズコ君を一人で産んで、一人で育てて来たんだ。それがどれだけ大変なこと  
か、おまえにわかるのか？

モモヤマ

先生は今でも許してないんですね？　ご主人のことを。

ムロマチ

それで、担任はなんて言ってたんだ。

アヅチ

実は、カズコ君の他に、アゲハって子もいなくなりました。二人を探すのを  
手伝ってほしいと。

ムロマチ

もうすぐ日が暮れる。待ってれば、そのうち帰ってくるだろう。

モモヤマ

でも、カズコ君にもしものことがあったら、どうします？

ムロマチ

あの女、どこまで人に迷惑をかければ、気が済むんだ。

ムロマチ・アヅチ・モモヤマが去る。カニタニ・サルサワ・ウスイケがやってくる。手  
には、たくさんの本。

カニタニ  
ウスイケ

どうして私たちがやらなくちゃいけないわけ？  
ムロマチさんとオオシマさんが行方不明なんだって。ミドリ先生、「近所を  
探してくる」って言った。

カニタニ

探すことなんかないんだよ。怒られるのがイヤで、逃げたんだから。

サルサワ

暗くなってきたね。

ウスイケ

今日も出るかな。

カニタニ

全部終わったってことにして、帰らない？

ウスイケ  
カニタニ  
サルサワ  
カニタニ  
サルサワ  
ウスイケ

でも、まだ半分もやってないのに。  
あいつらにやらせればいいんだよ。大体、この仕事は、プールの水を抜いた罰だろうか？  
私たちがやることないのよ。私たちだって、被害者なんだから。帰ろうか。  
ウスイケさん、後はよろしく。  
せめて、ミドリ先生に一言言ってから帰ろうよ。

そこへ、アゲハがやってくる。手には一冊の本。

アゲハ  
カニタニ  
サルサワ  
アゲハ  
カニタニ  
アゲハ  
ウスイケ  
アゲハ  
カニタニ  
アゲハ  
カニタニ

さよなら。  
さよならじゃない！ どうしておまえがここにいるんだ。  
先生たち、みんなであなたのこと、探してるのよ。  
そうなの？ 私は朝からずっとここにいたのに。  
（時計を示して）もうすぐ七時だぞ。十時間以上も何をしたんだ。  
この本を読むのに、夢中になっちゃって。まさか、そんなに時間が経ってる  
とは思わなかった。  
それ、何て本？  
おもしろいのよ。読んでみる？  
私は本が大嫌いなんだ。細かい字がビッシリ並んでるのを見ると、ジンマシンが出てきて。  
この本なら、大丈夫だと思う。ほら、見て。（差し出す）  
（受け取って）何だよ、これ。真っ白じゃないか。

アゲハ

何も考えないで、開くからよ。夏休みに関係あることを、頭に思い浮かべながら開くの。海とか川とかプールとか。

カニタニ

そうだな。たとえば、小学校の時、おばあちゃんの田舎で見た、ホタル。

カニタニが本を開く。本が黄色く光る。周囲に、虫の音が広がる。

カニタニ

(本を閉じて) 何だよ、この本!

アゲハ

おもしろいでしょう? 頭に思い浮かべたものが、何でも映るのよ。

カニタニ

偶然、ホタルのページを開いただけじゃないのか? (開いて) あれ? みんな、真っ白だ。

アゲハ

(本を取って) 次はサルサワさん。(差し出す)

サルサワ

(受け取って) 私は花火。小学校の時、お父さんに連れてってもらった、隅田川の花火大会。

サルサワが本を開く。本が七色に光る。打ち上げ花火が炸裂する音。

カニタニ

(本を閉じて) どういう仕掛けなんだよ、これ。

アゲハ

何の仕掛けもないみたい。いくら読んでも読み終わらない、終わりのない本なのよ。(本を取って) 次はウスイケさん。(差し出す)

ウスイケ

(本を取って) 私はね私はね、幽霊。

カニタニ

バカバカバカ!

ウスイケが本を開く。そこへ、ナナコがやってくる。

サルサワ  
ウスイケ  
ナナコ  
カニタニ  
ナナコ  
カニタニ  
ナナコ  
カニタニ  
アゲハ  
ナナコ  
カニタニ  
ナナコ  
カニタニ  
ナナコ  
カニタニ  
ナナコ  
カニタニ

（本を見て）この人、一昨日会った人だ。  
あの人、幽霊だったの？

いたいたいた。

（ナナコを見て）出た出た出た！

ちよつとあんた、時計を返してくれない？

こっちへ来ないで！

何よ。まさか、ネコババするつもりじゃないでしょうね？

私にとりつこうたつて、そうは行かないぞ。いざとなったら、この張り手で。

（本を取って）大丈夫よ。この人は何もしないから。

あら、幽霊を舐めてもらっちゃ、困るわ。

やっぱり、とりつく気だな？

もう半分とりついているのよ。気がつかない？

まさか、いつの間に。

どうして時計を渡したと思ってるの？ その時計を入り口にして、あなたの体の中に入るためよ。スルツ、グニユグニユグニユつて。

汚いぞ！（時計を外す）

投げるな！ 投げると死ぬよ！

やめろ！

静かに下に置いて。そこから十歩下がって。はい、いい子だね。今日のところは勘弁しといてやろうか。（時計を拾う）  
ありがとうございます。このご恩は一生忘れません。



アゲハ　でも、この本には、幽霊は恨みのある人にしかとりつかないって書いてあるよ。

ナナコ　やっぱり？

カニタニ　さては、騙したのか？

ナナコ　ごめんね。そう言わないと、返してくれそうもなかったから。

カニタニ　悪いことをしたら、罰を受けなくちゃね。

ナナコ　罰って何？

カニタニ　（右手を振り上げて）歯を食いしばれ！

ナナコ　やめて。これ以上、顔が腫れたら、お嫁に行けなくなっちゃう。

カニタニ　心配するな。おまえはもう死んでいる。

ナナコが走り去る。後を追って、カニタニ・サルサワ・ウスイケが走り去る。

アゲハ　凄い本ね。『ナツヤスマシ語辞典』

そこへ、ナナコが戻ってくる。

ナナコ　この本も返してね。（本を取る）

アゲハ　ちよつと、その本はうちの学校の。

ナナコ　よく見てよ。エンゼルマーク。この本は、天国の図書館で借りたの。

アゲハ　ちようだい。

ナナコ　あなたはいらないでしょう？　あなたはもう持ってるんだから。

アゲハ　持ってないよ。

ナナコ 何言ってるの。夏休みの真っ最中のくせに。

ナナコが去る。後を追って、アゲハが去る。

クサナギ

「私とウラシマさんは、二人でナナコを探しました。駅、デパート、本屋、公園。ナナコが行きそうな場所は全部行ったけど、全部空振り。そのうち、日が暮れてきたので、仕方なく、学校に向かいました。街灯に照らされた校門まで来ると、背後から叫び声。振り返ると、般若のような顔をした女がこっちに走ってくる。『口裂け女だ！』。私たちは思わず逃げ出しました」

カブト・ウラシマが飛び出す。後を追って、ミドリ先生・モモヤマが飛び出す。

ミドリ先生

待ちなさい、ムロマチさん！

カブト

何だ、ミドリ先生か。脅かさなくてくださいよ。

ミドリ先生

こっちに來なさい。その人から、離れるのよ。

モモヤマ

（カブトに）今までどこに行ってたんだ。僕たち、みんな探してたんだぞ。

カブト

駅前の十字路だよ。そこで、ウラシマさんに会って。

ミドリ先生

いいから、來なさいってば！（カブトの手を引っ張って、ウラシマに）この

ウラシマ

子はまだ中学生です。とりつくなら、私にとりつきなさい。さあ。

ミドリ先生

いや、僕は別にとりつくつもりなんか。

ウラシマ

それなら、さっさとあの世へ帰りなさい。早く。

ウラシマ

残念ながら、まだ帰れないんです。やらなくちゃいけないことがあるんで。

カブト　でも、ナナコがいないよ。時計もないし。

ウラシマ　そうだった。

ミドリ先生　ムロマチさん、もう話をしちやダメ。

カブト　あと一分だけ。

ミドリ先生　ムロマチさんもヤマダさんも、先生の言うことを全然聞いてくれないんだか

ら。先生は、あと一分だけ、話をさせてやってくれませんか。

モモヤマ　いいえ。これ以上、勝手な行動は許しません。急いで職員室へ行つて、迷惑

ミドリ先生　をかけた人たちに謝るんです。

モモヤマ　そう言わずに、お願いします。カズコ君のことを、本当に思っているなら。

ミドリ先生　でも……

モモヤマ　（カブトに）じゃ、僕は先生を呼んでくる。（ウラシマに）先生が来るまで、

必ずここにいてくださいよ。

モモヤマが去る。

カブト　ウラシマさん、ナナコが死んだ時のこと、覚えてる？

ウラシマ　覚えてるよ。僕はトラックに撥ねられて、五メートルも跳んだんだ。

カブト　どこに落ちたの？

ウラシマ　あの日はひどい大雪でね。車道の端には、雪が二十センチくらい積もってた。

その雪の上に。

カブト　じゃ、顔は潰れなかったんだね？

ウラシマ　目を開けることができたんだから、潰れてなかったんだらう。とにかく、ナ

カブト  
クサナギ

ナコのことか心配で、すぐに起きて、辺りを見回したんだ。  
立ったんだね？ 両目を開けて、雪の上に立ったんだね？  
（写真を見て）立ってるよ。おでこに右手を当てて、ちよっぴり悲しそうな  
顔をして。

カブト  
写ってるよね？

写ってるさ。

カブト  
クサナギ

（カメラを見て）写ってるよ。きつと写ってる。

カブト  
ウラシマ

そのカメラ、君のじゃないだろう？

カブト  
ウラシマ

私のだよ。今日から、私のものになったんだ。

カブト  
ウラシマ

ということは、一昨日の時点では、君のじゃなかった。

カブト  
ウラシマ

昨夜、母さんにもらったんだ。

カブト  
ウラシマ

やっぱりね。

カブト  
ウラシマ

どうしてそう思ったの？

カブト  
ウラシマ

昔、それと同じカメラを使ってたんだ。そのカメラで、鳥を撮ってたんだよ。

カブト  
ウラシマ

このカメラで？

カブト  
ウラシマ

そのカメラじゃないさ。僕のカメラは十五年も前のものだ。僕が死んだ後、

カブト  
ウラシマ

誰かの手に渡ったとしたら、今頃はボロボロになってるはずだ。

カブト  
ウラシマ

母さん、このカメラは大事にしてたんだ。一番古いカメラだからって。

カブト  
ウラシマ

いいものももらったじゃないか。大事に使えよ。

カブト  
ウラシマ

さあ、もう行けよ。一分て約束だったじゃないか。

カブト  
ウラシマ

ムロマチさん。

ミドリ先生

ムロマチさん、もういいでしょう？

カブト (ウラシマに) 銀河鉄道って、どこに止まるの? 校庭?

ウラシマ 校庭だと埃が凄いだろう? だから。(と指さす)

カブト 屋上?

ウラシマ 見送りに来るなよ。来たら、一緒に連れてっちゃうぞ。

ミドリ先生 それが目的だったんですか?

ウラシマ 違いますよ。

ミドリ先生 行きましょう、ムロマチさん。

カブト さよなら、ウラシマさん。

ウラシマ さよなら、カズコ。いい写真、撮れよ。

カブト・ミドリ先生が去る。

ウラシマ ナナコもないし、時計もない。でも、話だけはしなくちや。

そこへ、駅長がやってくる。

駅長 よかった。間に合いましたね。

ウラシマ 僕は切符を持ってないんですけど、乗せてもらえるんですか?

駅長 もちろんですよ。そのかわり、天上に戻ったら、すぐに裁判です。神様に無

断で、地上に戻るなんて、とんでもない重罪だ。百五十年前に、あなたと同

じことをした人がいました。その人の罰は天使学校のトイレ掃除でした。

ウラシマ それだけでいいんですか?

駅長 トイレは全部で一万もあるんですよ。その人は、いまだに掃除し続けている

そうです。

何だか、戻るのがイヤになってきました。

私は別に構いませんよ。そのかわり、あなたは永遠に地上をさまようことになりませんが。

頑張ります。トイレ掃除。

お連れの方はどうしました？

やっぱり、まだ戻ってきてないんですか？

ええ。残念ですが、置いていくしかないようですね。

え？ でも、発車まで、まだ三時間もあるのに。

台風が近付いてるんですよ。ほら、風が強くなってきたでしょう？

ウラシマ

でも、空はあんなに晴れてる。午前零時には真っ黒になりますよ。今夜の発車は、三時間繰り上げになります。

駅長

あと何分ですか？

ウラシマ

十分です。そんな。ナナコを置いていくわけには行きません。

ウラシマ

そこへ、ムロマチ・アヅチ・モモヤマがやってくる。

モモヤマ

あれ？ カズコ君は？

ウラシマ

ミドリ先生と職員室に行きました。

ムロマチ

カズコと一緒にいたっていうのは本当か？

ウラシマ

ああ。駅前の十字路で、偶然会ったんだ。

ムロマチ  
ウラシマ

話したのか、あんたのこと。  
そんなことするわけないだろう？ 僕は、あの子が生まれる前に死んだんだ。  
今さら、父親だなんて名乗る資格はない。

ムロマチ

カズコには二度と近付くな。

ウラシマ

その心配はいらないよ。僕は、今夜の列車で帰るんだ。

ムロマチ

だったら、いいんだ。行くぞ、アヅチ、モモヤマ。

ウラシマ

待ってくれ、アカネ。

ムロマチ

カズコはたくさんの人に迷惑をかけた。急いで、謝りに行かないと。

ウラシマ

その前に、僕の話聞いてくれ。頼む。

アヅチ

行こう、モモヤマ君。

ムロマチ

待て。私も行く。

アヅチ

その必要はありません。謝るだけなら、僕ら二人で十分です。

モモヤマ

カズコ君のことは僕らに任せて、先生は先生の真実を見つけてください。

ムロマチ

カッコつけるな、バカ！

アヅチ・モモヤマが去る。

ウラシマ

アカネ、黙って先に死んで、済まなかった。おまけに、ナナコなんかと死んだりして。でも、ナナコはただの友達なんだ。

ムロマチ

友達？

ウラシマ

大学時代の同級生さ。本当にただの同級生で、おまえが想像してるようなこ

ムロマチ

とは、何もなかったんだ。

ムロマチ

私が何を想像したって言うんだ。



ウラシマ  
ムロマチ  
だつて、おまえ、怒ってるじゃないか。カズコにも僕のこと、話してないし。  
あんたに何がわかる。

ウラシマ  
アカネ。

ムロマチ  
私は一人になったんだ。一人でカズコを産んで、一人で育てたんだ。

ウラシマ  
それは、本当に悪かったと思ってる。でも、ナナコとは本当に何もなかったんだ。

ムロマチ  
そんな話、誰が信じると思う。

ウラシマ  
誰も信じなくていい。でも、おまえだけには信じてほしい。あの日は、クリスマスプレゼントを買いに行ったんだ。おまえのための。でも、僕が選んだら、気に入ってもらえないかもしれないだろう？ だから、ナナコに協力を頼んで。

ムロマチ  
事故の時、あんた、何も持ってなかったじゃない。

ウラシマ  
ナナコが持ってたんだよ。持ったまま、天国に来ちゃったんだ。それで、五年も遅くなったけど、おまけにクリスマスでもないけど、おまえにプレゼントを渡すために、ここへ戻ってきたんだ。

ムロマチ  
何を。

ウラシマ  
それが、ナナコに持ち逃げされちゃって。

そこへ、ナナコがやってくる。

ナナコ  
時計よ。私が選んだんだから、絶対に気に入るよ。

ウラシマ  
ナナコ。

ナナコ  
ほら、自分で渡しなさいよ。(時計を差し出す)

ウラシマ

(受け取って、ムロマチに) メリークリスマス。十五年も遅れて、ごめん。(差し出す)

駅長

そろそろ列車が到着しますよ。急いで、屋上に上がってください。

ナナコ

今、行きます。

ウラシマ

(ムロマチに) 受け取ってくれないかな?

ナナコ

(ムロマチに) 受け取りなさいよ。自分の亭主が信用できないの?

ムロマチ

バカ。信用してたよ。(時計を受け取り、自分の時計を外して) これ、返すよ。十五年も借りっぱなしだったけど。(と差し出す)

ウラシマ

(受け取って) まだ使ってたのか?

ムロマチ

一日で五分も遅れるよ。でも、外すと、手首がスースーして、気持ち悪いか

ウラシマ

アカネ。

駅長

ほらほら、もう見えてきましたよ。

ナナコ

行こう、ムロマチ君。

ウラシマ

アカネ。

ナナコ

名残を惜しむんじゃないの。どうせ四十日も待ってれば、会えるんだから。

ウラシマ

そうか!

ナナコ

でも、その時はおばあちゃんだけどね。

ムロマチ

うるさいよ、バカ。

ナナコ

さあ、行こう。

ウラシマ

さよなら、アカネ。カズコによろしく。

ムロマチ

伝えないよ、カズコには。

ウラシマ

それでもいいよ。そう言いたかっただけなんだ。さよなら。

ウラシマ・ナナコ・駅長が去る。

ムロマチ　乙姫様の気持ちが変わった。きっと今でも、浦島太郎の帰りを待ち続けているんだ。

カブトがやってくる。空を見上げる。

カブト　銀河鉄道だ！

銀河鉄道の蒸気の音。ヤンマ・アゲハ・アヅチ・モモヤマ・ミドリ先生・アオタ先生・カニタニ・サルサワ・ウスイケ・ヤンマの母・アゲハの母・郵便屋がやってくる。空を見上げる。

カブト　クサナギ先生、その写真の意味がわかりますか？　そこに写ってるのは誰ですか？　母さんは何も言いません。そのかわり、私がアルバムを作るのを許してくれました。最初のページには、その写真を貼りました。クサナギ先生、そこに写ってるのは誰ですか？　私は私のカメラで、真実を写したのでしょか？

クサナギが立ち上がる。

クサナギ　それは僕にもよくわからない。君の真実は君だけのものだ。でも、僕にだつ

て、わかったことがあった。君たちの手紙が教えてくれた、僕だけの真実。玉手箱は開けちゃいけない。せつかく、終わらない夏休みが始まった。終わらないかもしれないものを、自分の手で終わらせちゃいけない。ヤンマ、アゲハ、カブト、君たちの玉手箱は、海の彼方へ放り投げろ。僕の夏休みだ。って、まだまだ始まったばかりだ。

クサナギが手紙を引き裂き、空に撒く。満天の星の中へ、銀河鉄道が消えていく。